

上磯町

や ふ らい
矢不來天満宮跡

—— 一般国道228号上磯町茂辺地法面工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ——



昭和 62 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

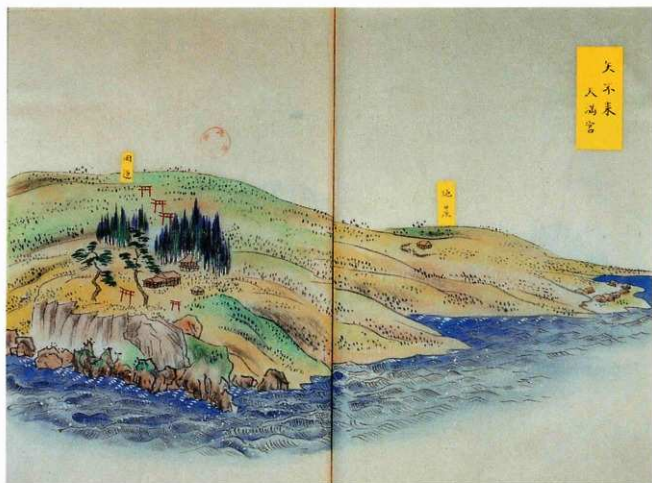
上磯町

や ふ らい
矢不來天満宮跡

——一般国道228号上磯町茂辺地法面工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和 62 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



矢不來天満宮 延叙歴検真図 安政6年 (市立函館図書館蔵)



調査終了状況 (南東から)



金銀銭

例 言

1 この報告書は、一般国道228号上磯町茂辺地法面工事に伴って、昭和62年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した矢不來天満宮跡の埋蔵文化財発掘調査に関するものである。

2 本書の作成は調査部調査第1課で行い、編集は畑・前田が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

I・V3：長沼孝，II・III・IV・VI：前田正憲，V1：花岡正光，VI4：畑 宏明

3 陶磁器、柱材・古木、動物遺存体などについては下記の方がたに鑑定を依頼した。

陶 磁 器 大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）

樹 種 同 定 三野紀雄（北海道開拓記念館）

動物遺存体 金子浩昌（早稲田大学）

4 現地の写真撮影は長沼，前田，遺物撮影は伊野正之が担当した。

5 図版1の空撮及び手水鉢の写真は落合治彦氏所蔵資料を借用させていただいた。

6 遺構図は、長沼，前田，石川 朗，山本 渉が作成し，前田，山本，篠崎淑子がトレスした。

7 遺物の実測，トレスは，前田，新庄素子，久末真紀子，三崎かおる，河口ひとみが行った。

8 遺構の表記は以下の記号を用いた。

SB：建物跡 SX：その他の遺構 SF：焼土

9 遺構，遺物の図は以下の縮尺にしたが，分布図，出土状況図などは任意の縮尺である。

遺構図：1/60・1/80 遺物：陶磁器1/2・1/3，古銭など1/1，鉄製品1/3，銅製品1/2

10 遺構図中の方位は平面直角座標の北，レベルは標高（単位m）を示す。

11 調査にあたっては下記の機関および人びとの指導ならびに協力を得た（順不同，敬称略）。

文化庁，奈良国立文化財研究所，北海道教育委員会，北海道開拓記念館，佐賀県立九州陶磁文化館，函館市教育委員会，市立函館博物館，市立函館図書館，上磯町教育委員会，松前町教育委員会，松前町史編さん室，上ノ国町教育委員会，(株)高橋組

宮本長二郎，釧 善和，氏家和典，小林孝二，出利葉浩二，千代 肇，長谷部一弘，田原良信，鈴木正語，石本省三，高橋豊彦，久保 泰，松崎水穂，齊藤邦典，藤島一巳，木野武次郎，御影慶三

目 次

I 調査の概要

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	1
4 調査概要	
(1) 発掘区の設定	1
(2) 調査方法	3
(3) 整理の方法	4

II 矢不來天満宮の沿革と周囲の近世遺跡

1 沿革	5
2 周囲の近世遺跡	6

III 遺跡の位置と環境

1 位置	9
2 周辺の旧道	10
3 層序	10

IV 調査

1 検出遺構	13
(1) SB-1 (拝殿)	14
(2) SB-1・2の敷石	14
(3) SB-2 (本殿)	15
(4) SB-3・4の敷石	19
(5) SB-3 (拝殿)	20
(6) SB-3増築部	20
(7) SB-4 (裏屋)	25
(8) SX-1 (手水鉢)	27
(9) SX-2 (稲荷社)	27
(10) 遺構小括	29

2 検出遺物

(1) 陶磁器

○ 碗 類	33
○ 皿 類	38
○ 鉢 類	41
○ 香 炉	42
○ 火 入 れ	42
○ 急 須	44
○ 瓶 類	44
○ 徳 利	46
○ 中国磁器	47

(2) 煉 瓦

(3) 木 杭

(4) 金属製品

○ 鉄 貨	48
○ 鉄 製 品	48
○ 銅 製 品	48
○ その他の遺物	53

(5) 遺物小括

V 各種分析

1 完新世の火山灰について	57
2 残存木材樹種同定	59
3 動物遺存体	60

VI まとめ

1 出土遺物との対比	61
2 文献資料との対比	61
3 遺構の構築年代	62
4 遺物からみた神社の盛衰	62
5 周辺の地名とその変遷	63

挿図目次

第1図	遺跡の位置・周辺の遺跡分布図	2	第21図	碗類 1 (盃)	34
第2図	発掘区設定図	3	第22図	碗類 2	35
第3図	道南の主な近世遺跡	7	第23図	碗類 3	36
第4図	道南の主な近世遺跡出土遺物	8	第24図	皿類 1 (灯明皿)	38
第5図	遺跡周辺地形図	9	第25図	皿類 2	39
第6図	土層断面図	11	第26図	皿類 3 (大皿)	40
第7図	遺構配置図	13	第27図	鉢類	42
第8図	SB-1 (拝殿)	15	第28図	瓶類ほか	43
第9図	SB-1・2敷石分布状況	16	第29図	徳利 1	45
第10図	SB-2 (本殿) - 1	17	第30図	徳利 2	46
第11図	SB-2 (本殿) - 2	18	第31図	中国磁器	47
第12図	SB-3・4敷石分布状況	21	第32図	煉瓦・木杭	49
第13図	SB-3 (拝殿) - 1	23	第33図	鉄貨	50
第14図	SB-3 (拝殿) - 2	24	第34図	鉄製品	51
第15図	SB-2・3・4敷石分布状況	25	第35図	銅製品ほか	52
第16図	SB-14 (覆屋)	26	第36図	碗・皿・鉢類分布状況	54
第17図	SX-1 (手水鉢) SX-2 (稲荷社)	28	第37図	盃・瓶・徳利類分布状況	55
第18図	第Ⅰ期遺構配置図	29	第38図	鉄貨分布状況	56
第19図	第Ⅱ・Ⅲ期遺構配置図	30	第39図	火山灰の鉱物組成図	58
第20図	参考建造物	31			

写真図版目次

図版 1	遺跡遠景ほか	71	図版11	皿、鉢ほか	81
図版 2	調査状況	72	図版12	瓶類	82
図版 3	SB-3(1)	73	図版13	徳利	83
図版 4	SB-3(2)	74	図版14	徳利、中国磁器ほか	84
図版 5	SB-2・4	75	図版15	鉄貨	85
図版 6	SB-2・4、SX-1	76	図版16	鉄製品	86
図版 7	SX-1・2	77	図版17	銅製品ほか	87
図版 8	碗類 1	78	図版18	動物遺存体	88
図版 9	碗類 2	79	図版19	残存木材	89
図版10	皿類	80			

表 目 次

第1表	矢不来天満宮跡遺物集計表	4	第3表	鉄製品計測表	67
第2表	鉄貨計測表	66	第4表	銅製品ほか計測表	68

I 調査の概要

1 調査要項

事業名 一般国道228号上磯町茂辺地法面工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委託者 北海道開発局函館開発建設部
受託者 財団法人北海道埋蔵文化財センター
遺跡名 矢不來天満宮跡（北海道教育委員会登録番号：B-06-48）
所在地 上磯郡上磯町字矢不來71-2
調査面積 600㎡
調査期間 昭和62年6月1日～昭和63年3月31日（現地調査6月22日～9月5日）

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター 理事長 植村 敏（昭和62年6月25日まで）
同 澤 宜彦（昭和62年6月26日から）
専務理事 山本慎一 常務理事 藤本英夫（昭和63年2月3日まで）
業務部長 間宮道男 調査部長 中村福彦
調査部調査第1課長 畑 宏明
同文化財保護主事 長沼 孝（発掘担当者） 同文化財保護主事 佐川俊一
（発掘担当者） 同嘱託 前田正憲 同嘱託 石川 朗

3 調査の経緯

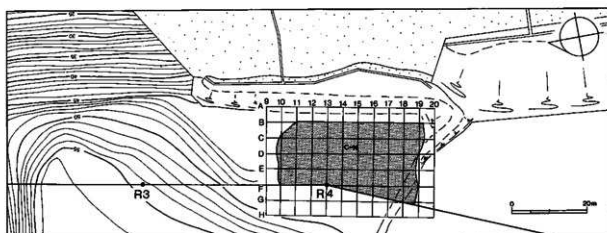
一般国道228号は函館市を起点とし、上磯、木古内、知内、福島、松前、上ノ国町を通り江差町に至る道南地方の主要道路のひとつである。そのうち上磯町富川～当別の区間は、海岸線までせまる段丘の急峻な崖下に道路が通る。この付近は地盤が弱く、昭和54年10月の豪雨の際には大規模な崩落事故が発生している。そのため道路管理者の北海道開発局函館開発建設部（以下函館開建）により、法面傾斜の緩和化などの安全対策工事が計画された。一方、この区間には、縄文時代をはじめ、中世～近世の遺跡が多数所在することが知られていたため、函館開建は昭和55年2月と昭和58年3月に分けて埋蔵文化財保護のための事前協議書を北海道教育委員会（以下道教委）あて提出した。

昭和55年2月協議の館野地区に関しては、館野2遺跡の一部について工事立会調査が実施されている。

矢不來地区に関しては、道教委によって昭和58年5月に所在確認調査、昭和59年4月に範囲確認調査が実施され、矢不來2遺跡と矢不來天満宮跡の2カ所について発掘調査が必要と判断された。矢不來2遺跡については昭和61年度発掘調査が実施されており、今回の発掘調査はそれに続くものである。

4 調査概要

（1）発掘区の設定



第2図 発掘区設定図

発掘区は、アルファベットの英文字と数字の組み合わせで表示し、大きさは 4×4 mとした。

設定の基準は、工事用地の境界杭 R 3, R 4 で、それらを結んだ線を南北の基線（F 基準杭ライン）、その線に直交し R 4 を通る線を東西の基線（13ライン）とし、第2図のように4 m 間隔でラインを設定した。なお、R 3, R 4 の測量成果は下記のとおりである。

R 3 $X = -246,710.361$ m $Y = 30,579.519$ m

R 4 $X = -246,756.178$ m $Y = 30,571.045$ m （平面直角座標 第 XI 系）

発掘区の呼称は、4 m 四方の区画の北東隅のラインの交点で表示した。例えば C ラインと14ラインの交点の南西側が C-14区画ということになる。

発掘区の方角は、平面直角座標系の南北方向と、 $N - 10^{\circ} 2' 58.1'' - E$ である。

（2）調査方法

調査は立木の伐採後、バックホーによって笹根などを除去することから開始した。その際、バックホーによる伐根は小型の木に限り、大型のものについては調査の進行に応じて伐根を切り落した。

調査の進行に伴い、調査区域のほぼ中央部にかなりの密度で偏平な礫が出現し、それらは建物跡の範囲を確認する指標となりうるものと予想された。したがって礫の分布状況を面的におさえながら柱穴、礫石などの検出に努める方向で調査を進めた。礫群の記録については一部現地で実測を行なったが、多くは、写真から平面図を作成した。その手順は、以下のとおりである。発掘区に合わせ1 m 間隔に水糸を張り、 1×1 m の範囲を真上から35mmカメラを用い水糸を入れた状態で撮影し、縮尺10分の1の大きさのプリントから図化を行った。

遺物については、すべて 4×4 m の発掘区内での座標値（北からと西からの距離、レベル）を記録し、その結果の一部は銭貨と陶磁器の分布状況図として第34, 35, 36図に示した。

SB-3 で確認された SF-1 ~ 5 の焼土、灰はすべてサンプリングし、水洗処理を行った。処理した土壌は約117kg、陶磁器、ガラス、金属器などの小片296点のほか、貝類、

獣、魚骨の細片などを検出した。

なお、礎石、緑石、礎盤のうち大型のものについては、上磯町教育委員会、矢不來天満宮などと協議した結果、現在の天満宮境内へ運んで保存することにした。

(3) 整理の方法

出土遺物の水洗、注記などは現地で行ない、その後の作業は現地調査終了後に札幌のセンターで行なった。遺物の大半を占める陶磁器は破片が細かく、接合作業に手間だったが、約94個体について復元することができ、全体の形状を知ることができるものや特徴的なものについて図示した。なお、復元は破片の接合のみで、内面および胎土の観察のため、石膏などによる欠損部の充填は行なっていない。銭貨を含めた金属器類については、材質に応じたアクリル樹脂を使用する保存処理を行なった。また、柱材は表面が腐食しているものの生木の状態で出土しており、樹種同定試料のサンプリング、実測写真撮影を行なった後は、密封し乾燥防止の措置をとっている。

(単位を除く)

グリッド名	陶 磁 器			古 銭			金		ガラス	その他	合 計
	磁 器	陶器他	計	銅 銭	鉄 銭	計	銅製品(B)	鉄製品(I)			
表層その他	68	144	212	37	9	46	2	6	102	1	369
A-17	1	3	4	1	0	1	0	0	0	0	5
18	5	2	7	1	0	1	0	0	0	0	8
A-11	2	12	14	1	0	1	0	3	1	1	20
12	1	66	67	10	0	10	1	22	94	3	197
13	91	331	422	11	2	13	4	16	3	2	460
14	62	306	368	21	18	39	3	11	13	9	463
15	82	66	148	24	7	31	3	12	13	12	219
16	18	219	237	17	0	17	0	10	8	1	273
17	79	112	191	31	16	47	1	58	14	12	323
18	60	118	178	32	6	38	0	11	10	5	242
19	0	1	1	2	1	3	0	0	0	0	4
C-10	0	1	1	0	0	0	0	7	1	0	9
11	1	0	1	4	1	5	0	1	1	0	8
12	14	20	34	6	3	9	30	302	7	1	383
13	52	64	116	21	4	25	13	13	8	2	177
14	20	65	85	23	9	32	0	4	1	5	127
15	66	713	779	123	27	150	19	95	16	27	1,086
16	89	535	624	57	2	59	15	50	104	26	878
17	13	14	27	13	1	14	0	0	144	5	190
18	25	44	69	70	15	85	2	12	27	9	204
19	4	0	4	2	2	4	0	0	1	0	9
D-10	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	7
11	0	1	1	0	0	0	0	0	19	0	20
12	2	51	53	5	2	7	2	13	9	2	86
13	31	12	43	17	2	19	8	3	109	28	210
14	30	46	76	28	0	28	8	20	111	5	248
15	58	208	266	59	6	65	10	31	30	7	409
16	21	93	114	23	4	27	0	0	36	10	187
17	22	48	70	31	6	37	0	8	17	20	152
18	99	48	147	41	6	47	1	5	10	13	223
E-10	3	0	3	4	0	4	0	0	0	0	7
11	0	16	16	4	0	4	0	1	1	0	22
12	23	40	63	10	8	18	3	29	4	1	118
13	35	16	51	14	3	17	25	21	77	5	196
14	46	9	55	36	2	38	39	8	208	4	352
15	13	8	21	8	0	8	6	2	39	8	84
16	15	6	21	55	22	77	1	5	8	15	127
17	31	211	242	59	18	77	1	7	4	4	335
18	89	425	514	34	19	53	3	10	19	9	908
19	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	2
F-13	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
14	4	0	4	5	0	5	0	0	6	0	15
15	2	2	4	6	1	7	3	0	4	1	19
16	16	17	33	45	10	55	0	1	1	5	95
17	124	108	232	79	18	97	1	2	32	15	378
18	24	39	63	3	0	3	0	0	8	0	74
合 計	1,461	4,242	5,703	1,073	250	1,323	205	799	1,327	272	9,629

Ⅱ 矢不來天満宮の沿革と 周辺の近世遺跡

1 沿革

鎌倉時代から室町時代にかけて、津軽海峡を渡り、渡島半島に住み付いた人々の集団があった。これらの人々を渡り党と言った。さらにこの集団のなかから若狭などの商品流通などで財力を得て館主となる小豪族が渡島半島各地に出現しはじめた。室町時代末期のことである。

この頃、下之国守護職として茂別館に居城していた下国家政は、南部氏に追われ津軽から渡島半島に渡った安東盛季の一族であり、有力な館主の一人であった。康正2(1456)年に志苔館付近の鍛冶屋でおきたといわれる和人とアイヌのいさかいに端を発した事件は、翌長禄元(1457)年には、コシャマインの戦として道南一円に拡がった。この時、一般に道南12館として知られている諸館は次々に攻め落とされたが、茂別館と、上之国守護職蠣崎季繁居城の花沢館の2館だけは最後まで残った。このうち、茂別館の館神として祀られていたのが矢不來天満宮と言われている。以下に縁起をはじめとするいくつかの史料から、矢不來天満宮の姿を年代順に追うことにする。

矢不來天満宮に残る木版の天満宮縁起によれば、文和年間(1352～1355)に「門別海岸」に漂着した御神体(菅原道実木像か?)を「蝦夷ら今の社地へ勧請せり」といい、社地の東西の小沢を「カムイヤンケナ井」と呼んでいたとある。後に、コシャマインの戦があった時、下国家政はこの地に陣を構えていた。その時、コシャマイン一統の射る毒矢が家政の陣所に1本もとどかず、これは天満宮加護によるものとして、「矢不來」と文字を改めたところ。以上のように、「矢不來天満宮縁起」では、コシャマインの戦における故事により「茂辺地村守護神」として「奉崇敬」と伝えている。茂別郷土誌(大正6年)によれば、この時家政が譜代重臣の池田半太夫輝元を神動にあてたという。

しかし、これを実証する史料は残されていない。矢不來天満宮が具体的に史料に登場するのは江戸期になってからである。『有川在神社棟札記録』に元禄14(1701)年下国要季が社殿を再建した際の棟札の記事があるが、社殿の規模等については不明である。次に、天明3(1766)年には「遷宮」の記事がみられ、これが今回の調査場所と考えられる。また、『元宮茂邊地村鎮守矢不來天満宮事書』によると、寛政年中の建物の規模は本殿が1間社、拝殿は2間3間、石造鳥居1基、木造鳥居4基で、社地は東西204間、南北120間と記され、末社の筆頭に、稻荷社が記されている。その後、明治5年の開拓使による『壬申八月・十月巡回御用神社取調』の記録でも、社殿の規模には差がないことからみて、天明期に遷宮して以降の規模が踏襲されていたものと考えられ、安政6年に作成された『延叙歴代真図』の絵図の姿ともほぼ一致する。また稲荷社の規模は、明治5年の史料により初めて3尺とあり、その起源は、元和元(1615)年と記されている。

以後、明治8年10月に村社に列せられる。また、明治21年には茂辺地に遙拝殿が建てられる。そして大正5年12月7日に移転を願い出、翌6年3月6日許可となり、同年8月茂辺地の集落へ移転を済ます。さらに、昭和3年11月15日に現在の地、茂別館内に移転を願い出、同12月7日許可となり、現在地へ遷宮し、今日に至っている。

2 周囲の近世遺跡

道南の近世遺跡 近年、北海道南部において、近世遺跡の調査が活発に行なわれている。例えば上ノ国町の上ノ国漁港遺跡、松前町の福山城、上磯町の戸切地陣屋跡、函館市の五稜郭跡、江差町沖に沈んだ開陽丸などがそれである。ここでは、矢不來天満宮跡の出土遺物について、比較の対象となるこれらの遺跡の概要を述べるとともに、出土遺物についても若干ふれたい。

福山城

松前藩広 福山城は、5代藩主松前慶広が慶長5（1600）年に福山館を福山の台地に築いたのが始まりで、後17代藩主松前崇広になり、嘉永2（1849）年の幕府による築城命令で、嘉永3（1850）年に着工し、安政元（1855）年に完成した。福山城は天守を有する城として、日本で最後に建てられたもので、特に海防を重視した設計が施されているのが特色である。その後明治2年、箱館戦争で城は荒廃し、明治6年に天守閣、本丸御門、本丸表御殿を残し、城は取り壊された。表御殿は明治8年に松城学校として開校、同23年に玄關のみが新築小学校に利用された。その後、昭和24年天守閣は焼失した。

史跡整備 昭和59年より史跡整備のための発掘調査が実施されている。調査によれば、遺構部上面は、攪乱などにより保存状態はあまり良くないが、江戸中期以前の遺構は良く保存されている。出土遺物は陶磁器が多く、16～18世紀中葉頃のもの为主で、国内製品はもとより明代末、清代の中国製品の多いことが特色である。

上ノ国漁港遺跡

漁港整備事業 上ノ国漁港（大洞）は、古くから天然の良港として知られている。湾内より多数の陶磁器類が採集されることから、漁港の後方にひかえる勝山館との関連が注目されていた場所である。
海底発掘調査 折しも漁港整備事業が計画され、これに先立って埋め立ての対象となる範囲の海底発掘調査が行なわれた。その結果、陶磁器を中心とする多数の遺物が得られた。陶磁器は、16世紀末～近代に至るまでの各時代のものがみられ、中でも18世紀代のものが最も出土量が多い。碗・皿などの日常雑器や播鉢などが主体である。肥前→肥前系→瀬戸・美濃系と時代を追って主たる産地が移行していく過程がうかがえる。

松前藩戸切地陣屋跡

箱館開港 戸切地陣屋は、戸切地川に沿ってのびる舌状台地上にあり、一方は戸切地川の崖に、二方を山岳地帯に囲まれた要衝の地で、箱館開港に伴う周辺防備の目的で、幕命により松前藩がこの地に築いた。安政2（1856）年に着工し、同年10月に完成したが、明治元（1868）年の箱館戦争で焼失した。五稜郭と同様崗倉にある築城法により、平面形が四稜の星形を呈する閉塞で、
箱館戦争 南東部に突出した砲台部を有し、土塁と空壕を巡らせている。
土 塁

史跡整備 史跡整備のための発掘調査が昭和55～61年まで行われた。この調査で、郭内における主な遺構はすべて調査し終え、遺構とともに多くの出土遺物を得た。遺物は、陶磁器、金属製品、石製品、ガラス製品などがあり、陶磁器は、肥前あるいは瀬戸・美濃などの系統のものが出土しており、五稜郭と同様コンブラ瓶も出土している。時代的には幕末のものが主体であり、明治期と思われるものは非常に少ない。金属製品は、砲弾などの箱館戦争に関わるものや、鉄鍋、鉄瓶などの多岐にわたり、石製品では、滋賀県本高島産硯などが確認されている。

五稜郭跡

箱館奉行所 箱館開港に伴い、幕府直轄となった函館周辺地域の本庁として、幕府は箱館奉行所を置いた。

この奉行所は、松前藩戸切地陣屋などと同様、蘭書にある築城法により、平面形が五稜の星形を呈していることから五稜郭と呼称された。郭、堀割とも石垣積みとし、石材のほとんどは函館山の安山岩を用いた。安政4（1857）年に着工し元治元（1864）年に竣工した。以降箱館戦争があり、明治4年に郭内の建物の多くは解体された。

石垣積
箱館戦争

五稜郭跡は昭和59年史跡整備のための発掘調査を行っており、遺構とともに多数の遺物が出土している。遺物は、陶磁器、金属製品、瓦、木製品、石製品、ガラス製品など多岐にわたり、陶磁器類は建物跡の北側から多く検出される傾向にある。幕末～明治期にかけての日常雑器が多く、上手なものは少ない。肥前よりも、瀬戸・美濃系の製品が多く出土している。中でも雑器とともにコンブラ瓶が出土していることは注目される。

史跡整備
幕末～明治
コンブラ瓶

開陽丸

幕府によって安政3（1856）年オランダで建造された。当時の最新鋭軍艦開陽丸は、慶応4（1868）年8月品川沖で榎本らの徳川脱走軍によって奪われ、他3艦、4軍送船とともに蝦夷地へ向った。同年11月1日箱館に入港し、榎本軍は次の拠点、福山城、館城、江差港の占領を目ざし同年11月14日江差沖へ向かい、翌朝江差沖に到着した開陽丸は夜9時ごろより岸に向かって強く吹く風雪によって寄せられ座礁した。

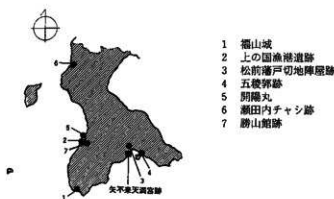
箱館戦争

その後、何度か大砲などが引揚げられていたが、昭和49年埋蔵文化財として登録され、昭和50年より本格的な海底発掘調査が開始された。引揚げられた遺物は、多くが開陽丸の艦装関係であるが、その中には幕末に生産された陶磁器も含まれている。

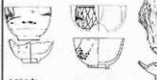
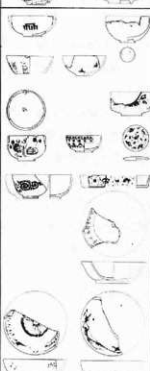
海底発掘調査
幕末

他に、瀬田内チャシ跡、勝山館跡などからも近世初頭の陶磁器が若干検出されている。

以上のように、北海道南部における近世陶磁器を出土する遺跡は、17世紀代では福山上ノ国漁港、瀬田内チャシ跡、勝山跡など、18世紀代では、福山城・上ノ国漁港などがあげられる。福山城においては舶載品の多いことが特徴的である。矢不來天満宮跡からも国内産ではあるが、唐津の刷毛目鉢や肥前の御神酒瓶類など、18世紀代の遺物が若干出土している。19世紀代の陶磁器は、上ノ国漁港、戸切地陣屋、五稜郭、開陽丸などで出土している。なお開陽丸では明らかに明治10年以降と思われるものも含まれている。上ノ国漁港は、最も出土遺物の年代幅がある遺跡で、国内産陶磁器の変遷あるいは流通経路を知る上で貴重な遺跡であると言える。また、特に福山城からは、福山館時代の中国明代末の青磁、染付などが多数出土している点が注目される。



第3図 道南の主な近世遺跡

	上ノ国高港遺跡	史跡福山城	史跡松前藩戸切地陣屋跡	開陽丸
第Ⅱ期	1600年 			
第Ⅲ期	1690年 			
第Ⅳ期	1780年 			
第Ⅴ期	1868年 	 JAPANESE POTTERY.		

五稜郭跡に関しては図示されている遺物が少ないため省略
 させていた。なお第Ⅱ～Ⅲ期に関しては大橋康三氏
 による肥前陶組の変遷に基づき、第Ⅴ期に関しては松崎水
 権氏の区分に従った。矢不米天満宮跡の出土遺物はおおむ
 め第Ⅳ期～第Ⅴ期に相当する。

第4図 道南の主な近世遺跡出土遺物

Ⅲ 遺跡の位置と環境

1 位 置

矢不來天満宮跡は、函館西岸の海岸段丘の崖縁に位置する。この段丘は標高50～60mで、新第三紀の凝灰岩や砂岩などで構成されている。遺跡の眼前には函館山がひかえ、遠く津軽海峡のかなたには下北半島を望む。北へ転じては、函館市街とそれに続く大野平野が眺望され、背後には駒ヶ岳がそびえる。

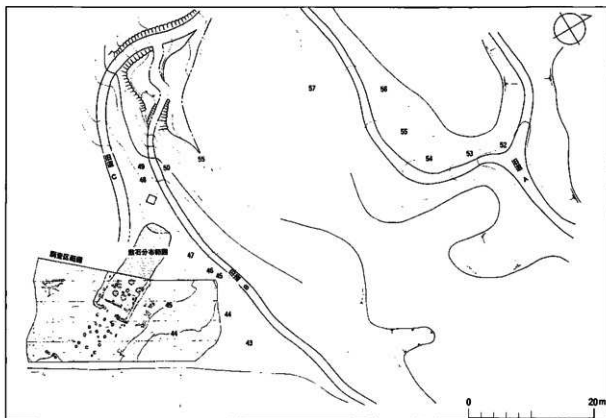
遺跡は、上磯町の矢不來市街と茂辺地市街のほぼ中間に位置し、付近には縄文時代の矢不來2遺跡をはじめ、中世の矢不來館跡や茂別館跡、そして幕末の矢不來台場跡などが分布する。矢不來館跡は、天満宮跡の北方約1km弱の距離にある。矢不來川の二股に突出する台地を、延長100m近い2条の壕で区切る要害堅固にして規模の大きな館跡である。内耳鉄鍋、青磁・白磁・染付などの中国製陶磁器、越前系の陶磁器、開元通宝・元豊通宝・皇宋通宝・至大通宝・永樂通宝などの中国銭など、一部は15世紀代にさかのぼりうる遺物が採集されている。矢不來川は谷は深いが小流で、館跡の下流300mほどの矢不來市街で海に注ぐ。矢不來海岸は巖で、近年は海底整地を行い海苔の養殖に力を入れている。

茂別館跡は、天満宮跡の南方約1.5kmの茂辺地川左岸段丘上にある。大館と小館の2郭からなり、現在の天満宮は大館内にある。茂別館跡から河口までは1kmほどで、館跡の前

周辺の遺跡

矢不來館跡

茂別館跡



第5図 遺跡周辺地形図

面には茂辺地市街がひろがる。茂辺地川は、函館近辺では最も鮭の回帰の多い川で、大館と小館の間の湧水を利用して孵化事業も行われている。

2 周辺の旧道

3本の旧道 国道228号線は、現在遺跡の下の海岸線を通っているが、かつての旧国道は山間部を通っていた。矢不來天満宮跡の周辺には、矢不來市街と旧国道をつなぐとみられる小規模な旧道が3本（旧道A～C）分布している。これらは、矢不來天満宮の裏手にあり、段丘地形に沿ってほぼ北東～南西方向にのびている。（第3図）

旧道A これは、3本の旧道の中では最も北側にあり、遺跡裏の一段高い平坦地から沢地へ通じる。沢の中ほどで二股に枝分かれする。北東方は、馬の背状の尾根を経てJR矢不來トンネルの北口付近の法面で跡切れる。南西方は、台地上で次に述べる旧道Bに出合う。西方は、台地上へのびるが、終点は確認していない。これらの道幅は1.5～2m。

旧道B これは、調査区西方の台地の裾から北東方向へのび、旧道Aと同様にトンネルの法面で跡切れる。南西方は、次の旧道Cと出合うのが、その部分は旧道Cによって削られている。道幅は約1m。

旧道C これは、台地の上から矢不來天満宮跡の裏へ通じる道である。勾配は急だが、道幅は約2mで最も広い。

高参道 これらの道は、現国道開通前に旧国道と矢不來市街、そして矢不來天満宮跡をつなぐ役割を担っていたものと思われるが、旧道A・Bについては、鉄道開通の昭和5年の時点でほぼその役を終えたものと考えられる。旧道Cはルートからみて、矢不來天満宮跡の裏参道の可能性がある。なお、道幅が広く、旧道Bよりも新しく削られている点については、社殿の解体や記念碑建立の際の拡張の可能性が高い。なお、表参道については、もともと存在しなかったか、あったとしても現国道工事によって掘削されているため、うかがい知ることはできない。

3 層序

矢不來天満宮及びその周辺の基本的な層序は次のとおりである。（第4図）

I層 黒褐色土。表土層で、層厚10～30cm。近世の遺物がわずかに混じる。

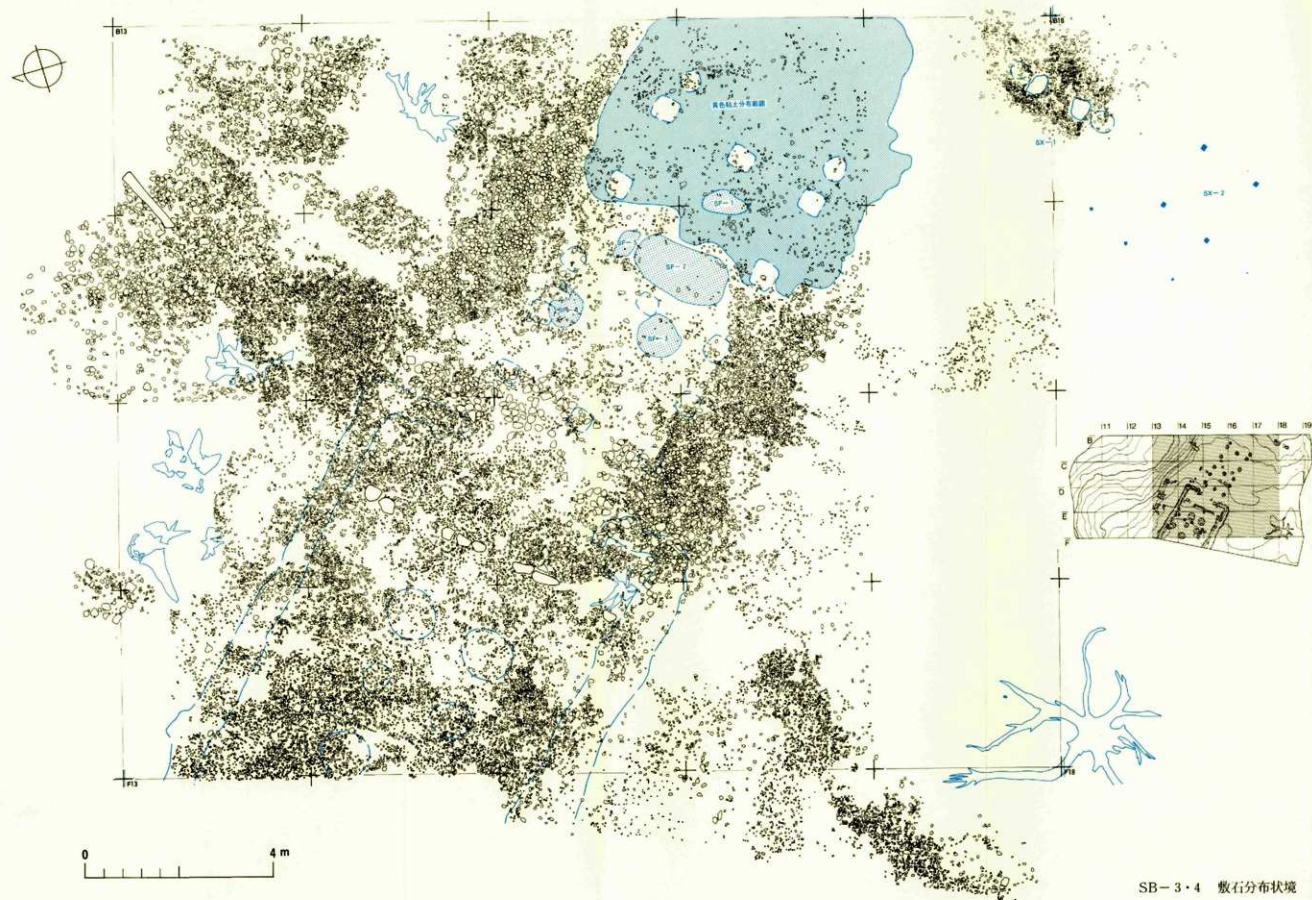
II層 黒色土。層厚40～50cm。上部に薄く3枚の火山灰層が認められる。この火山灰層については別項（V-3）で詳述する。II層からは縄文時代の剥片石器がわずかに出土した。

III層 暗褐色土。IV層からII層への漸移層で、層厚5～15cm。

IV層 黄褐色土。いわゆるローム層。IV層の上面には、等高線に沿ってクラックがみられる。調査区北半の段差は断層によるもので、その高低差は約2mある。

矢不來天満宮跡の遺構は、II層の上面に残されている。遺構部分には、II層上部の火山灰層はみられず、社殿建築の際に整地によって削られたことを示している。

遺構面はSB-1からSB-4までの4面あり、以下、これらの遺構に関係する敷き石、盛り土などの層については、それぞれ固有の名称を用いて表記する。



SB-3·4 散石分布状况

Ⅳ 調 査

1 検出遺構

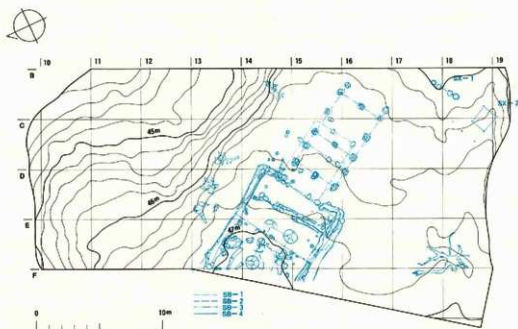
検出された遺構は、以下のとおりである。

- | | | |
|------|--|------|
| SB-1 | 礎石を有する建物跡で、梁間2間桁行3間の規模であり、拝殿と思われる。 | 礎 石 |
| SB-2 | SB-1と同時期に建てられ、向拝5尺身舎1間であり、本殿と思われる。 | |
| | SB-2に付属して、溝状遺構や縁石などがある。 | 付属遺構 |
| SB-3 | SB-1の上に盛り土して構築されており、梁間2間桁行3間3尺で拝殿と思われる。建て増しも行っている。 | 建て増し |
| SB-4 | SB-2を覆う建物と思われる、梁間3間2尺で桁行は不明である。SB-2に付属する溝状遺構を切ってSB-4の柱穴を掘っている。 | 覆 屋 |
| SX-1 | SB-3の南東に位置しており、SX-2と並び、手水鉢と思われる。 | |
| SX-2 | SX-1と並び、方形に杭を打ち込んだ遺構であり、稲荷社と思われる。 | |

以下、文中では原則的に建物名を記号で示すこととする。遺構記号に付した建物名は、先に沿革の項で紹介した各種史料との対比によって決定したものである。

調査の結果、建物跡は少なくとも3時期にまたがっている。それぞれの建物の新旧関係は、まず、SB-1とSB-2がほとんど同時に建てられ、次にSB-1に盛り土した上にSB-3を建てる。最後にSB-4がSB-2を覆って建てられる。SX-1とSX-2の時期は、SB-3構築時以降と思われる。

次に、各遺構の位置関係では、SB-1はSB-2の前方（南東）に位置するが、両者の主軸は若干ずれており、SB-2の軸はSB-1の軸と比べやや西偏する。SB-2に



第7図 遺構配置図

伴なう溝状遺構や緑石の軸は、すべてSB-2の軸と一致している。SB-3はSB-1とほぼ主軸が一致しており、後に建てられるSB-4も同一軸上である。すなわち、SB-2（本殿）以外の建物はすべて軸が一致しており、SX-1とSX-2はこの軸と直角方向に並び、建物群の北側に並ぶ古木列も、SB-2以外の建物の軸に平行している。

以上、遺構の性格、配置状況の概略を述べた。次に各遺構の説明に移りたい。最下層の出土遺構から述べる。

(1) SB-1（拝殿）

礎石 この建物跡は、この遺跡で唯一礎石を有する。地盤は、第Ⅱ層の黒色土上面の部分的な
小砂利 削平や、暗褐色土の盛り土などで造成し、その上面に小砂利を全面に敷く。この小砂利の
炭化物の混入 間には炭化物が混入していた。

SB-1は、SB-2の前（南東）に位置し、これに付属する溝状遺構に一部接する形で構築されている。SB-1とSB-2は主軸がずれている。

地盤 地盤（礎石下の処置）は、地盤を若干窪め挙大の礎を底に敷き、この上に礎石を乗せる。礎石は、径が30～40cmで厚さが10cm前後の偏平な河原石である。礎石上面のレベルは、すべて標高46.5mである。礎石を据えるための窪みは、底のレベルが標高46.2～46.3mで一定しているが、径の大きさは不揃いである。1・5・9・10の柱は礎石が抜かれている。7の礎石は若干位置がずれている可能性がある。なお10の柱については、窪み内部の礎を図示しなかった。

2間3間 礎石間の距離は、梁間は、1・2・3の間が各1間幅あり合わせて2間である。桁行は、9と13の間が1間弱でやや狭いが、3・7・9の間は各1間で、合わせてほぼ3間である。建物内部は6・7の間が半間である。

間取り 内部は、2間×1間（前面南側）と2間×2間（奥・北側）の間取りになっている。前面の地盤はほぼ水平に均されており、後方の地盤は傾斜していることから、前面は土間・奥は座敷として使われたものであろう。建物内部に何本かの柱穴が認められるが、直接SB-1と関わるものは無く、これらの柱穴はSB-1構築以前の可能性がある。

時期 なお、次に述べるSB-2の付属縁石が、SB-1の小砂利層の上に据えられていることや、縁石部の段の削り出しとSB-1の地盤の整形を同時に行っていることから、SB-1とSB-2はほぼ同時期か極めて近接した時期の可能性が高い。

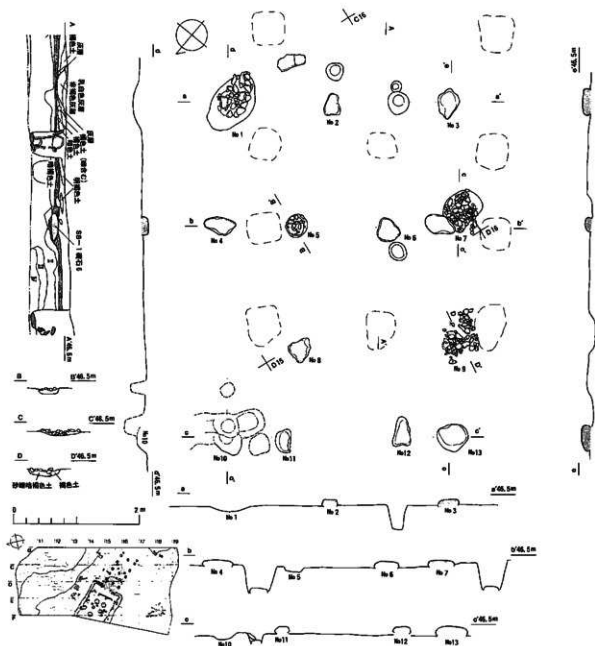
(2) SB-1・2の敷石

小 礎 これは、SB-1の小砂利層の上位に分布し、挙大ぐらいの小礎で構成される。この中には、SB-3・4の敷石（第10図）にみられる偏平な礎は認められない。

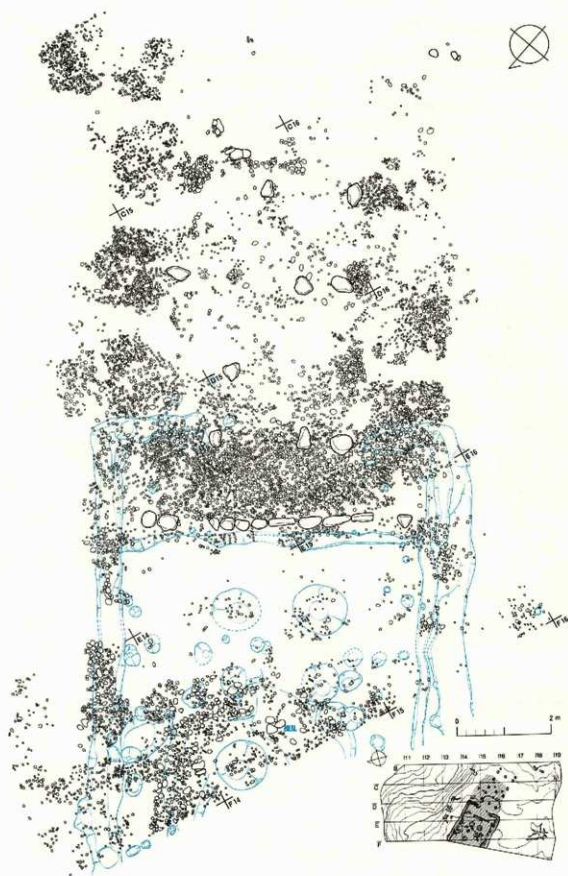
敷石の分布 SB-1の建物内部には、土間部分を除き分布している。建物外部には、桁行両側面に2m前後の幅で分布するが、建物の前面部にはない。敷石の、梁行方向に抜けている部位は、トレンチ調査時に取り除いたものである。また、敷石は一部礎石を覆うほど厚く堆積しており、さらにSB-1と縁石列との間は敷石上面が平坦に均されている。この時期の敷石は、礎の大きさがほぼ一定である。敷石部からの出土遺物は、鉄貨などの出土が多い反面陶磁器などは稀である。なお、第7図の色刷部は、敷石下SB-2の遺構を示している。

(3) SB-2 (本殿)

この遺構は、建物主体部と縁石、そして溝状遺構の3遺構から成っている。位置はSB-1の後方(北西側)に接している。建物主体部の地盤は建物に沿って方形に盛り上がり土盛り土、縁石列部を削り周囲より際立たせている。建物主体部分は一部に石碑による攪乱を受けている。なお第8図の溝状遺構上面を覆う色刷の礫は、敷石や、小砂利より若干下位に堆積していた礫であり、同じく遺構部中央の色刷の礫は本殿下に敷かれた角礫で、こ



第8図 SB-1 (拝殿)

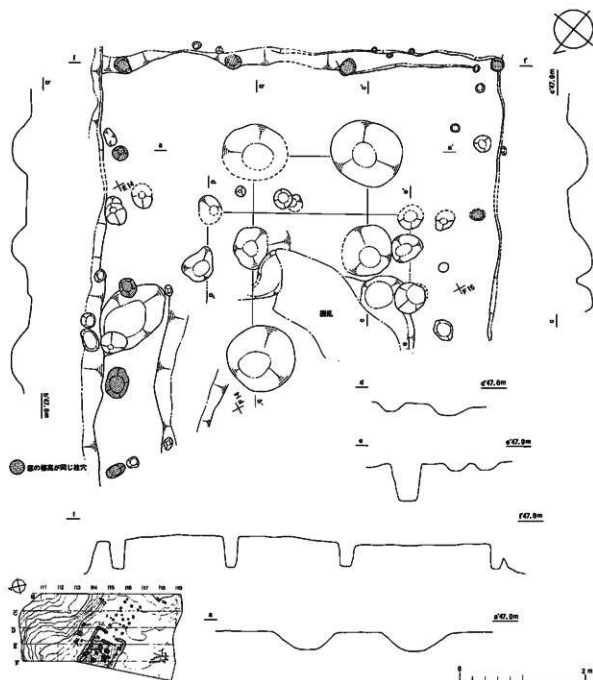


第9圖 SB-1・2敷石分布状況

れらは敷石の礫とは異なる。

SB-2を構成する各遺構の位置関係は、中央に主柱穴(1~5)を持つ建物が有って、
 緑石 建物の前方に緑石を配し、これらを囲むように鉤の手状に溝状遺構がめぐる。これらはす
 溝状遺構 べてSB-2中央の建物の軸を基準としている。

柱穴(地盤?) 建物跡は、径の大きい主柱穴(1~5)と、径の小さい副柱穴(6~9)とがある。主・
 小砂利を充填 副柱穴とも盛り土上面より掘り込まれており、内部には小砂利を充填していた。主柱穴の
 形状は、平面が円形で、断面形は半円ないし橢圓形を呈し、地盤上面より30cm程掘り込ま
 れている。この柱穴底のレベルは、標高46.5m程で一定している。主柱穴の桁行は、柱穴



第11図 SB-2(本殿)-2

1・3間では1.5m、2・5間は1.8mである。梁間は1.8mである。副柱穴は、主柱穴の桁に対し外側へ60～80cm張り出し、副柱穴の梁は、主柱穴の桁行間を通る。

以上の柱間から、この建物は梁間1間、桁行1間5尺の規模で、神社本殿と考えられる。神社本殿建物内部は、主柱穴3～5（残りの1本は攪乱により消滅）が身舎で、柱穴1・2は向拝柱であり、向拝柱は身舎より5尺張り出す。副柱穴は、身舎外郭を2尺程張り出して巡る回縁部の柱であろう。いわゆる1間社流造の社殿と思われる。神 社 本 殿
身 舎
向 拝
回 縁

なお、柱の建て方であるが、柱穴内に充填された小砂利には柱痕が認められなかった。また、上面が若干攪乱されている状況もあり詳細は不明である。

また、回縁部下位の地盤には、敷石に混ざって大型の角礫が分布していた。（第8図）角 礫
これは、赤味を帯びた安山岩質の角礫で、敷石面より盛り上がる状態であった。桁行に沿って0.4m程の幅で分布し、梁方向は攪乱などにより散在する。

縁石列は、本殿向拝柱より1間ほど前方に並ぶ。縁石は、Ⅱ層上面を削り本殿平坦部より一段下げ、小砂利を敷いた上に置かれる。縁石列の本殿側は一段高くなり、地盤と縁石とのすき間に小砂利を詰める。縁石は主として細長い転石を使用しているが、安山岩状節理の棒状石もみられる。また、縁石のうち北東側の2個は、偏平な円礫で、SB-1の礫石を再利用している可能性もある。縁石に沿って本殿側に4本の柱穴があり、これと同様の柱穴が溝状遺構に沿って並ぶ。これらの柱穴は規格がそろい柱穴底のレベルも標高46.2m程で一定している。また本殿の周囲を囲むことから瑞垣と思われる。縁 石
細長い転石
4本の柱穴
瑞 垣

溝状遺構は、本殿桁方向に長く、本殿を方形に囲む様に巡らされている。向拝に至る部位は途切れている。溝状遺構と本殿との位置は、本殿の側面では2.6～3m（約1.5間）程離れ、本殿の前では向拝柱より3.6m（2間）離れている。溝の規模は、深さ0.4m、幅0.5～0.7mで、断面形は函形を呈する。覆土は、小礫の混じる暗褐色土で、特に覆土上面には小礫が密に分布する。また、溝状遺構内部に何本かの柱穴が認められたが、多くは溝が構築された後に掘り込まれたもので時期が異なる。溝 状 遺 構

溝状遺構の性格は、覆土に小礫が詰まり上面が平坦に均らされていることなどから、上部の構造物を安定して据えるための基礎として考えられ、玉垣ではないかと考えている。玉 垣

（4）SB-3・4の敷石

これらの敷石は、第Ⅰ層（表土）を削いだ段階に検出されたもので、SB-4を覆う。敷石の敷かれた時期は、SB-3の桁行両側は、SB-3の構築時に敷かれたもので、SB-3の裏側からSB-4にかけては、SB-4の構築時に敷かれたものである。点々と敷石が欠落した場所があるが、これは杉の根の成長に伴って敷石が押し広げられたためである。

各部位によって、敷石の形状に変化が認められた。まず、SB-4の全面を覆う敷石はSB-4（覆土）小礫で、びっしりと敷かれている。ただし、遺構部の西側には、大正10年に天満宮跡石碑を建立した際の深い攪乱があり、この付近には敷石とは別に、コンクリート基礎に使用したとみられる川砂利が分布していた。SB-2に伴う縁石は、これらの敷石に埋まっており、小礫の隙間から縁石の上面がわずかに見える程度であった。小 礫
攪 乱

SB-3の上面を覆う敷石は、2種類ある。第1は建物内部に散在する小礫であり、第2は建物の両側から後背地に約2mの幅で敷かれた大型の偏平礫である。同様の偏平礫はSB-3（溝敷）偏 平 礫

SB-3北東側斜面にも分布するが、多くは上段から流れ落ちたものである。SB-3の
粘土張り 遺構内部では、表土を剥いだ時点で焼土や部分的な粘土張りを確認した。しかし、柱穴は、
偏平礫を剥ぎ取った段階でようやく確認出来た。

建物の周辺では、南西側に小砂粒の分布が認められるものの、層厚は非常に薄い。また、
SX-1の敷石は、小砂粒程の大きさで、中央ほど密に厚く堆積する。

(5) SB-3 (拝殿)

盛り土 この建物は、SB-1の礎石の上に20cmほど盛り土し、その面から柱穴を掘り込み構築
されたものである。SB-2の前方に位置しており、建物の周囲には第10図に示した様に
偏平な礫 偏平な礫が敷かれていた。

盛土は、SB-2前方(南東)では黄色粘土や、粘土まじりの褐色土などを使い、中央
部では基礎に砂利まじりの暗褐色土を使い、表面は粘土まじりの暗褐色土を盛る。後方(北
西)では盛り土を行わず、礫をわずかに敷いている。盛り土は建物前方(南東)ほど厚
くなり、建物桁行両側はゆるやかなスロープとなる。盛り土上面のレベルは標高46.5mほ
どで水平に均されている。なお、第11図の平面図及び土層断面図は敷石をとり除いた段階、
第12図の平面図は込め石を除いた段階のもので、エレベーション図は第Ⅲ層上面でそれぞ
れ作図したものである。

柱穴は、合計15ヵ所検出された。これらは盛り土の上面から掘り込まれており、プラン
円形のプラン は方形ないし隅丸方形を呈するものが多い。柱穴1・2は他の柱穴と異なり、円形のプラン
円礫を詰める 円礫が半円形で、この内部には華大の円礫が詰め地業としている。円礫は柱穴掘り込
方形のプラン み面より上に盛り上げられている。他の13本の柱穴は、すべてプランが0.4~0.5mの方形
ないし隅丸方形を呈するもので、掘り込み面からの深さは0.5~0.6mである。柱穴の底に
礫 盤 は偏平な礫を1~3枚程敷いている。以下この礫を礎盤と呼ぶ。礎盤は強く柱穴底に食い
込み、礎盤上面のレベルはほとんどが標高46mで一定している。柱穴の掘方と柱との間に
偏平礫を詰める は、偏平礫を垂直方向に何枚も詰め込んで柱を固定している。これは主として柱穴上部に
栗材の柱 込められ、礎間には暗褐色土を充填している。柱穴3・11には面取された4寸角程の栗材
の柱が残っていた。また柱穴15の盛り土面では、炭化材が検出された。炭化材の幅は最大
20cmを計り、桁行の横木に梁の横木を組んでいる状態が観察できた。

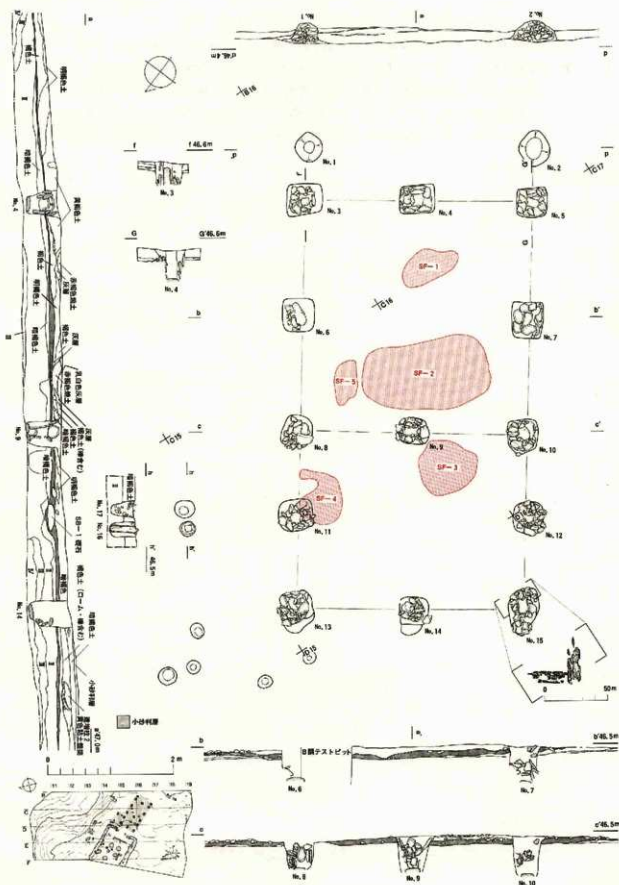
柱穴の間隔は、梁間が2間で、桁行は柱穴8・11が4尺、柱穴11・13が5尺、柱穴1・
2間×3間×1尺 3は半間で他は1間である。建物本体は、梁間が2間あり桁行は3間3尺である。桁行の
半間の底 建物前面には半間の^{ひし}底がある。

建物内部の盛り土上には、小礫が散在する。また、平坦に均らされている盛り土上の地
焼土の堆積 盤に、厚く堆積した焼土が5ヵ所確認された。このうちSF-4や5は、部分的に柱穴を
被覆しており、SB-3が廃棄された後にこの焼土層が形成されたことを示している。
SF-2は非常に厚く堆積しており、層厚は20cm程ある。

間取り 建物の内部は、前方に2間×2間、後方に2間×1間3尺の2間の間取りが考えられ、
前者は焼土などの存在から土間、後者は土間あるいは座敷であったものと考えられる。

(6) SB-3増築部

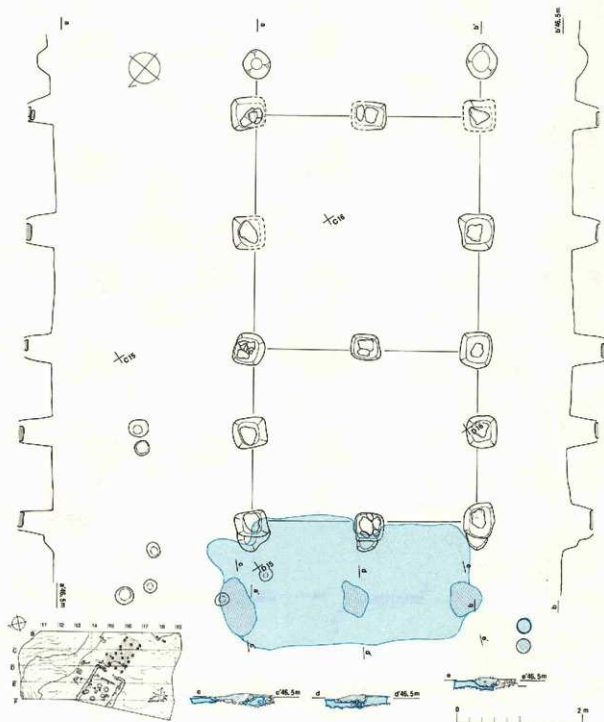
黄色粘土張り SB-3の裏側に黄色粘土を張った部位が検出された。これは、SB-3とSB-2の



第13図 SB-3 (拜殿) - 1

緑石との間に構築されたもので、SB-3の建増しと考えられる。

構築方法は、SB-3構築時の敷石面を若干掘り窪め、黄色粘土と礫まじりの褐色土を増築範囲に敷く。次に柱を建てる部位を、径0.5~0.8m程の範囲で若干掘り窪め挙大の礫を敷き、その上位に黄色粘土を版築する。黄色粘土の厚さは10~15cmで、この上面のレベルは標高45.55mで一定している。この時の敷石分布状況を第15図に示す。この敷石は、偏平礫を含み、SB-3構築時に建物の周囲に敷かれたものであり、この図では建物両側



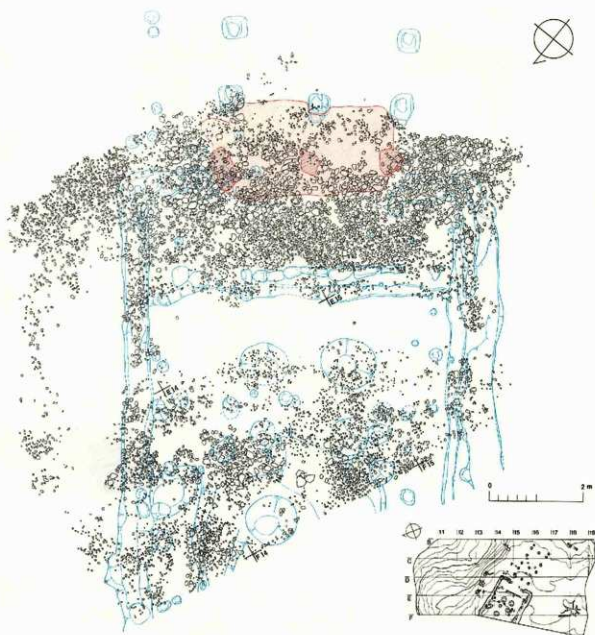
第14図 SB-3 (拝殿) - 2

面の敷石は省略してある。先に第12図で示した最上層の敷石分布図とは、SB-3の建物裏側からSB-2にかけてが異なり、この範囲は、SB-4構築時に敷かれたものである。

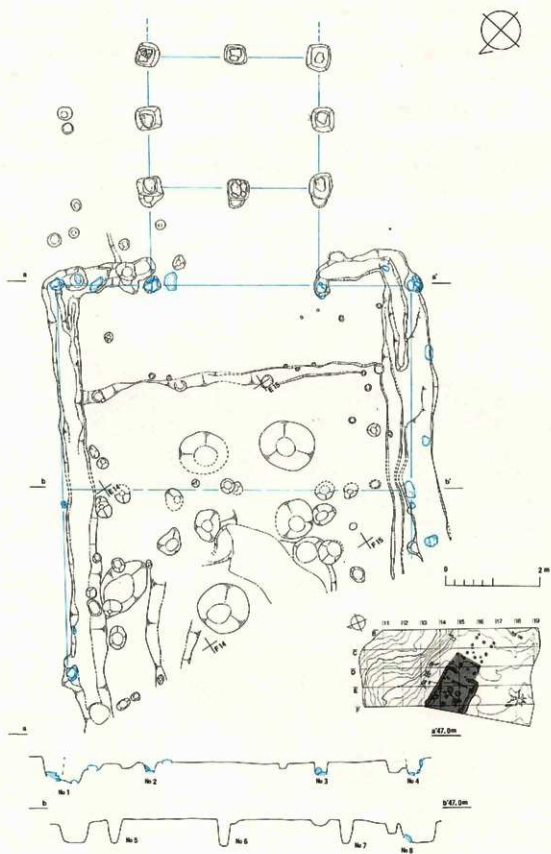
増築部の桁行の軸は、SB-3の桁行と比べ、やや北偏する。各柱間の距離は1間で増築部の幅は5尺である。この構造は^{ひし}庇風で物置などとして使われたものであろう。 物 置

(7) SB-4 (覆屋)

この遺構は、SB-2にまたがって検出された。地盤は、SB-3の裏側からSB-2全面にかけて小礫を敷き均らしている。また、縁石とSB-3との間は、SB-3の増築 小礫を敷く部に暗褐色土を盛り、さらに小礫を敷く。縁石は、敷石に覆われた状況となる。



第15図 SB-2・3・4 敷石分布状況



第16図 SB-4 (覆屋)

柱穴は、SB-2の溝状遺構を掘り込んでいます。柱穴の構造は、a-a'列の様に礎盤を有するものと、b-b'列の様に堀立柱のものがある。どみらも同時期に構築されたものであり、a-a'列の礎盤上のレベルと、b-b'間の柱穴底のレベルは、標高46.2m程度ではほぼ一致する。

柱穴間の距離は、a-a'列で柱穴1・2が7尺、2・3が2間あり、3・4が約7尺で、桁行との距離は柱穴5と7がそれぞれ約4尺ある。また、a-a'列と、b-b'列の桁行は1間4尺強である。なお、柱穴6は、規模と底面のレベルでは、SB-4に伴う柱穴と一致しているが、SB-4の主軸より東偏して位置していることから、SB-4とは区別して考えたい。

以上のように、SB-4はSB-2をまったく覆屋であると思われ、一連の建物の中で最後に建てられたものである。また、SB-4とSB-3との間は7尺離れており、柱穴2と3は、SB-3の桁行の延長上にある。さらにSB-4とSB-3の主軸が一致していることから、SB-3とSB-4の間は併殿として棟続きにしていた可能性が高い。

(8) SX-1 (手水鉢)

この遺構は、B-17とB-18の2区にまたがり、SB-3から南へ4m程離れる。SX-1上面のレベルは、SB-2の上面より0.8m、SB-3の上面より0.4m程それぞれ低い。

遺構は、敷石の中央に礎石2個を挟んで柱穴2本が一列に並ぶものである。地盤は第Ⅱ層を4m×2m程の長円形に浅く掘り、礎石を据えてから小礫を敷き固めている。小礫の厚厚は最大10cmで、中心部はど厚く、レンズ状に堆積する。

柱穴は、円形プランで断面形は函形であり、底面は水平に近い。柱穴1には5寸角の面取柱の一部が残っていた。柱穴2は柱材が抜き取られており、礎盤も同時に抜き取られたものと思われる。柱穴底面のレベルは、どちらも標高45.5mで、柱穴1の礎盤上面のレベルは標高45.75m程である。礎盤は、SB-3やSB-4の柱穴の場合と同様に、偏平な小礫を使用している。

礎石は、上面が平坦に加工され、下面は粗く成形した安山岩質の切り石である。SB-2の回縁下部の地盤で検出された角礫と同様、赤褐色を呈する。

柱穴間の距離は7尺で、礎石間は同じく3尺強であり、礎石と柱穴は同軸上に並ぶ。礎石は、上面が平坦に加工されていることや、礎石が非常に大形であることから、手水鉢を乗せていたものと思われ、礎石両側の柱穴は雨除け用のものと思われ、切妻破風の造りが考えられる。なお、手水鉢の周辺からは鉄貨が多数出土している。

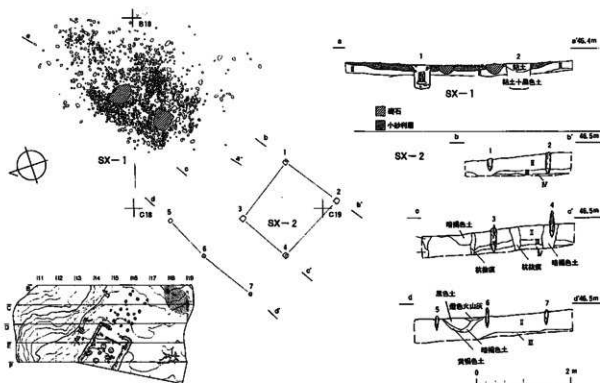
(9) SX-2 (稲荷社)

この遺構は、B-8とC-8の2区にまたがり、SX-1の南西側に並ぶ位置にある。遺構面は、第Ⅱ層上面にあり、面取された杭が4本と、丸太状の杭が3本確認された。SX-1の様な敷石は認められない。

杭1・3・4は、ほぼ同じ太さで、約5寸角である。杭2は、一部面取された杭で、いずれも先端を尖らす。杭4には抜きかけた痕がある。杭5〜7は、径が3寸前後の丸太状

カラマツ のものである。樹種は、杭 2・3・5・6 がヒバで杭 4 がイチイ、杭 7 がカラマツであった。

杭間の距離は杭 1・2 が 0.7m、杭 1・3 が 0.75m、杭 2・4 が 0.8m、杭 3・4 が 0.6m である。この 4 本の杭は、間隔 2～2.6 尺ではば方形に配列されており、この角杭を基台とし、稲荷社を乗せていたものと思われる。また 3 本の丸太状杭列には、カラマツ材が含まれることから、明治期以降のものと思われるが、目的は不明である。



第17図 SX-1（手水鉢） SX-2（稲荷社）

(10) 遺構小括

以上の成果から、矢不來天満宮跡の遺構の時期は、以下に示す3期に分類される。

第Ⅰ期 SB-1, SB-2

第Ⅱ期 SB-2, SB-3 (SX-1, SX-2?)

第Ⅲ期 SB-2, SB-3, SB-4

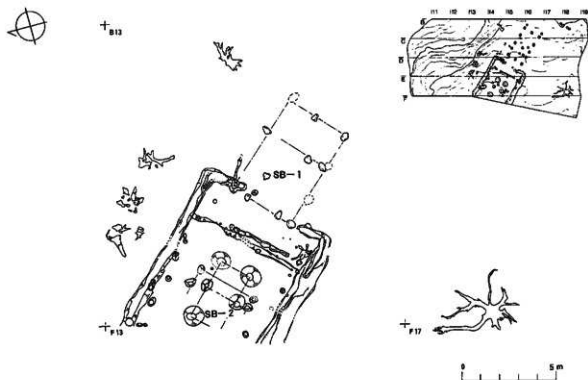
ここでは、各時期の建物の建て方などの特色を要約する。

第Ⅰ期

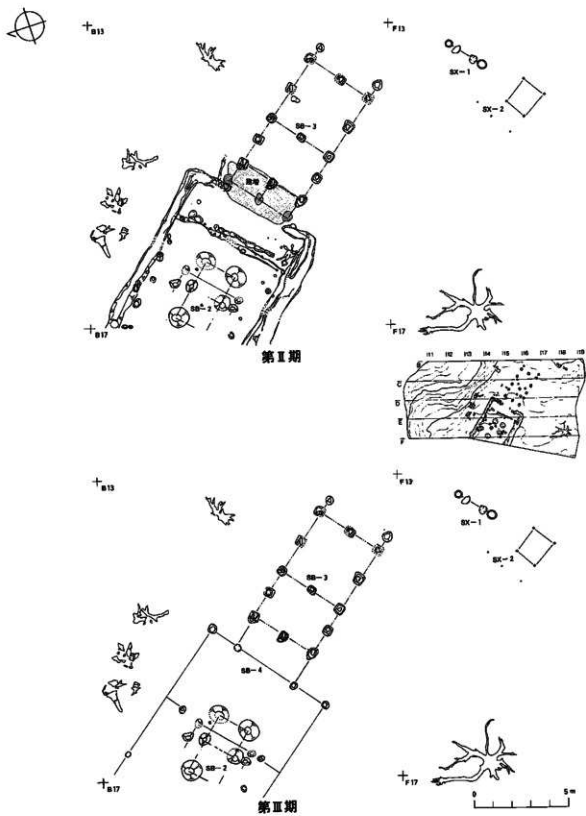
SB-1（拝殿）が建物群の中で、唯一礎石を有する建物である。礎石は、建物範囲全面に敷かれた小砂利層の上に据えている。この小砂利層はSB-2（本殿）の縁石下位に及び、さらにSB-2の範囲を覆っている。このことからSB-1とSB-2は、ほぼ同時期に建築された可能性が高く、建築順から言えば、SB-2の方が早く建てられたのかもしれない。

SB-2は、柱穴内部に充填された小砂利に柱痕が認められないという特色がある。これが、単に礎石の抜き取りを示すものか、あるいは小砂利の上に直接横木を渡し柱を建てたものかは判然としない。また、建物の周囲には瑞垣や玉垣が2重に巡らされていた可能性が高いが、設置の順序は不明である。

この時期の特色として、建物地盤上面に小砂利を敷き固めていることが揚げられる。さらに、SB-1と縁石の間に小礫を敷いており、これは「石の間」と呼ばれているものである。以上のように第Ⅰ期は、SB-1の2間3間の拝殿と、その後方の「石の間」、そ



第18図 第Ⅰ期遺構配置図



第19図 第Ⅱ・Ⅲ期遺構配置図



福岡市宇宮歌 村社 八幡神社 創建明暦元（1655年）



福岡市宇宮歌 村社八幡神社 本殿一坪（弘化2年再建）



福岡市宇宮歌 村社八幡神社 拝殿土台



松前郡大澤村宇荒谷 村社稻荷神社 創建元文5(1740)年



松前郡大澤村宇荒谷 村社稻荷神社 稻荷社



松前郡大澤村 村社大澤神社 手水鉢

して瑞垣、玉垣で囲まれたSB-2の1間社流造の本殿によって構成されている。

第Ⅱ期

SB-1の上面に盛り土してSB-3（拝殿）が建替えられる時期である。盛り土はSB-3の建物の範囲と一致しており、黄色粘土や粘土まじりの土を、厚い所では20cm程度盛り上げ、地盤を固めている。礎盤を有する柱穴で、柱と柱穴との隙間に偏平な礎を詰め、柱を固定している。また、SB-3の周辺には、柱穴で使われたのと同様の偏平な礎を敷いている。

建物内部には、5ヵ所に焼土が分布しており、そのうち3ヵ所はSB-3と同時期と思われる。地床炉として暖を取っていたのであろう。

SB-3を構築する際に、SB-2の縁石との間の「石の間」にも、建物の周りに敷かれたのと同様の偏平な礎を敷いている。そして、この部位の地盤を粘土まじりの土で固めた上で、此を増築する。第Ⅱ期は、建増などを行なっていることから存続期間が長かったのではないだろうか。

第Ⅲ期

SB-4（覆屋）が構築される時期である。SB-4はSB-2の覆屋の可能性があり、その構造は、簡素な小屋掛け風のものが考えられる。SB-4の柱穴は、SB-2に付属する溝状遺構を掘り込んでいる。柱穴の構造は、建物外壁の柱穴だけがSB-3と同様に礎盤を有するようだ。

SB-4の地盤は、全面を敷石で覆う。SB-2構築時に敷いた小砂利の上に挙大の礎を敷く。SB-3と縁石との間の「石の間」は、特に厚く堆積し、縁石の段は認められなくなる。この敷石によって、SB-4の建物内部は平坦に均らされる。この第Ⅲ期の終末をもって矢不來天満宮は遷宮することとなる。

・手水鉢・稻荷社

手水鉢の構築時期は、柱穴構造から、Ⅱ期ないしⅢ期が考えられる。しかし、手水鉢を据える礎石と、SB-2本殿建物回縁下位の砕石とが同じ石質であることから、あるいは第Ⅰ期に初現するのかもしれない。

稻荷社に関しては全く時期が不明である。ただし、稻荷社後方の丸太状の杭列は、材質から明治以後と思われる。

なお、安政6年の絵図（口絵1）によると、社殿は板壁、檜皮葺風に描かれている。発掘調査の結果、土壁や屋根瓦、屋根の置き石などは確認されず、この絵図の姿を想定してまいらう。地盤の仕上げ方には貝灰や、にがりなどを利用する例があるらしいが、この遺跡の場合は炭化物混じりの小砂利を敷く方法と、粘土を張る方法が採用されている。

最後に社殿周辺には、ヒバの古木が繁っていたが、建物群南西側にはひととき木立つ大木があった。この周辺では、銭貨などが多数出土しており、御神木として信仰の対象となっていた感が強い。

2 検出遺物

今回の出土した遺物の出土総点数は貝類も含めると約10,300点で、このうち陶磁器が最も多く全体の56%で、他に銭貨13%、金属製品10%などがある。

(1) 陶磁器

陶磁器は遺構部及びその周辺から出土しており、その総点数は破片で5,703点である。出土点数の最も多いのは、徳利で、関西系の東北産と思われるものが多い。碗は、主として瀬戸・美濃系が多く、また御神酒瓶では肥前産が主体となる。以下、碗類・皿類・鉢類・瓶類・徳利の順に復元可能となったものについて述べる。

・碗類

碗類としたものの中には、盃から飯茶碗までを含む。中間的な形態のものについて、明確な区分を行ないがたいので、ここでは便宜上口径寸法によって分類した。

盃 (第21図)

口径7cm前後のものまでを盃とした。(1~5)は丸腰のものである。1)は高台が比較的高く、盃付は鋭角的に削られる。器外面には線描による松葉などが描かれ、濃絵付は部分的に行なう。高台外面には、櫛目文を巡らせ、高台内に「福」の字銘がある。釉掛けは盃付と高台縁を除いて行なわれる。釉調は透明で、全面に貫入が認められる。呉須の調子は明るい。幕末で関西か瀬戸・美濃系と思われる。2)は河骨文で、葉脈部は胎土に線彫し、濃絵付を行なう。釉調は透明、呉須の調子は暗い。幕末から明治初めで瀬戸・美濃系と思われる。3)口縁がわずかに端反りし、高台径がやや小さく若干外反する。全体に肉厚である。胴部外面は、胎土に龍文を線彫し、濃絵付を行なう。盃付のみ露胎する。釉調は若干青みがある。呉須の調子は明るい灰青色。幕末から明治初めで瀬戸・美濃系と思われる。4)器形は3と同様口縁が若干端反りする。ただし湯溜りは肉薄である。胎土に松の線彫の後、濃絵付を行なう。盃付を除き釉掛けし、釉調は透明、呉須の調子は青味が強い。幕末から明治初めで瀬戸・美濃系と思われる。5)同じく口縁が若干端反りする。器下半が非常に肉厚となる。器外面高台部まで染付し、釉調は透明、呉須の調子は青味が強い。幕末から明治初めで瀬戸・美濃系と思われる。6・8)は胴が細く、端反りするもので6)は口縁外面に1本、腰に2本横走させ、その間を線描で埋める。釉調はやや青味があり、呉須の調子は鮮やかな青。関西か瀬戸・美濃系である。8)は高台盃付に特色があり、この造りは7)と共通する。盃付に段差があり内側が凹む。器外面に山水を線描の後に濃絵付する。濃絵は濃淡の階調差が大きい。高台内に字銘有。釉調は透明、呉須の調子は明るい青。関西か瀬戸・美濃系と思われる。7)は器外面に、仙芝福寿文を施し、口縁内側に1本横線が巡る。盃付は段差を付けて削り、器下半はやや肉厚がある。釉調は透明、呉須の調子は鮮やかな青。幕末から明治初めで瀬戸・美濃系と思われる。9)は白磁の盃、端反りがあり、非常に肉薄。盃付は鋭角的に削り出している。釉調は若干青味がある。幕末から明治初めと思われる。10)は端反りがあり、9)より肉厚がある。口縁内側に金彩による波文を、見込みに青絵で菊花を上絵付し、そして花心に金彩を施す。釉調は青味があり盃付は鋭角的に尖がる。幕末から明治初めと

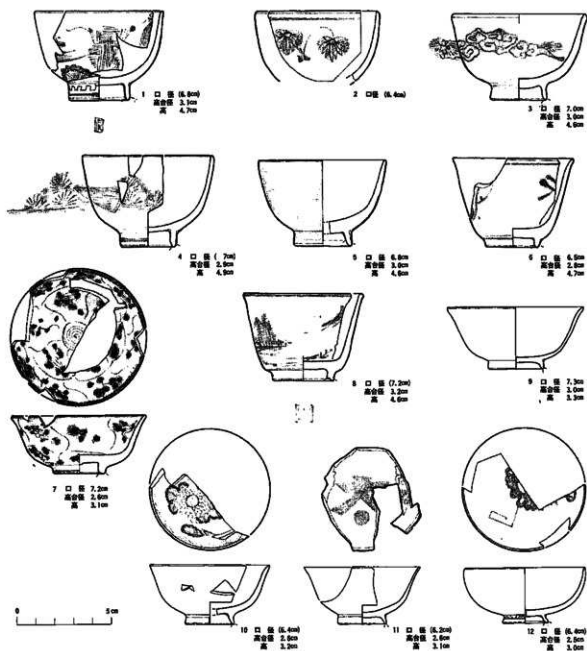
線 描
濃 絵 付

瀬戸・美濃系
線 彫

盃付に段差

仙芝福寿文

上 絵 付
金 彩

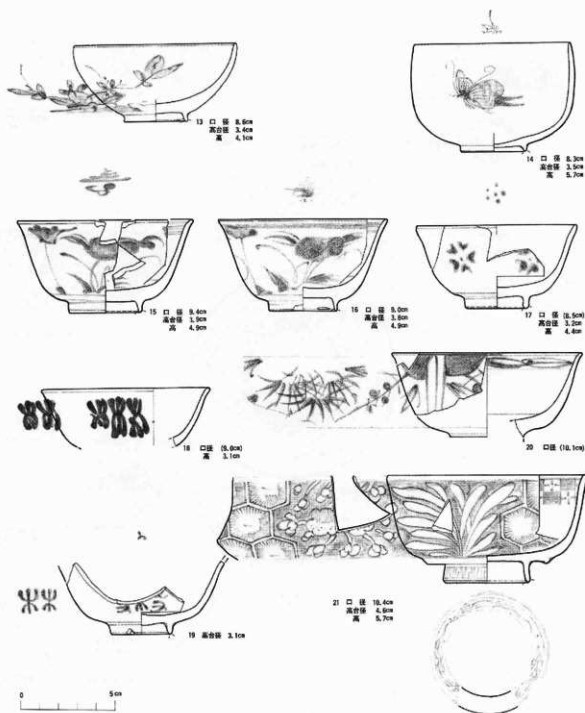


第21図 碗類 1 (盃)

思われる。11) 肉薄であり前 2 者と比べ器面にやや重みがある。鋭角的に尖がる疊付、青絵で見込に「名酒」「太」と上絵付される。釉調は透明。幕末から明治初めと思われる。12) 丸腰で口縁が垂直に立ち上がる肉薄の盃である。高台外面に染付で柳目文が小さく入る。見込に青絵で上絵付される。高台は非常に低く、やや外側に開く。釉調は透明。幕末から明治初めと思われる。

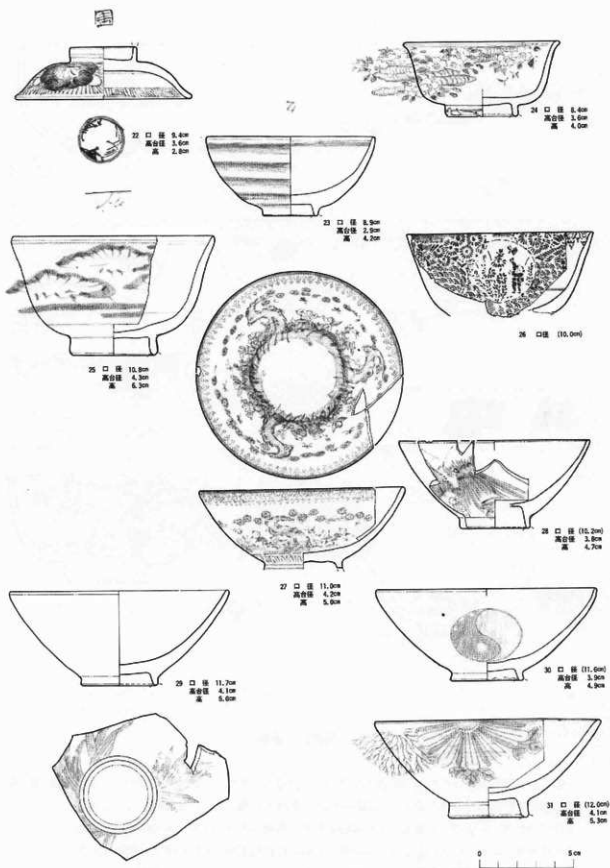
碗 (第22・23図)

口径 8 cm 以上のものをまとめた。13) は低い高台で下半が肉厚の浅碗である。器外面に線描は、線描による桃文に濃絵付を行なう。染付部はロクロ痕が縞状に表われる。釉調は青味



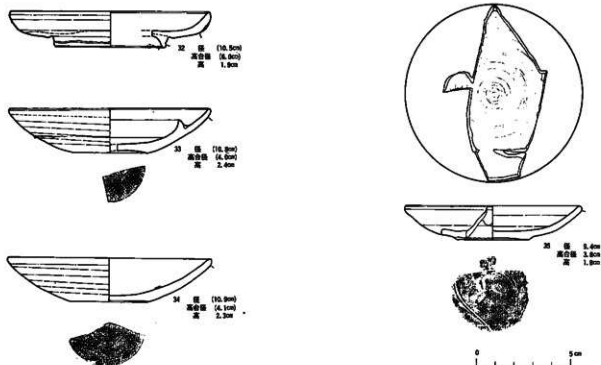
第22図 碗類 2

が強く、呉須の調子はやや暗い灰青色を呈す。18世紀中～後期で肥前産と思われる。14) 肥前産は口縁がやや内傾する湯呑である。高台は低く、全体が肉薄である。器外面には、線描に濃絵付の蝶と、見込みに火焰宝珠文が線描される。軸調は青味があり、畳付のみ露胎。湯溜りは肉薄である。呉須の調子は明るい青である。18世紀末から19世紀前半で肥前産と思われる。15・16) は同じ手のもので、腰が丸く端反りがある。器外面は、3面に仕切られた格狭間に草花を濃絵付し、見込には鳥に海を描き、畳付は15が鋭角的に尖がる。どちら



第23圖 碗類 3

も疊付を除き施釉される。釉調は青味が強く、呉須の調子は深い青で濃絵付部が若干盛り上がる。幕末から明治初めで瀬戸・美濃系と思われる。17) 若干端反りする口縁を有し、瀬戸・美濃系口縁に薄く鉄釉がかかる。器外面に、桜花を濃絵付で散らし、見込には梅花を施す。釉調は青味があり、呉須の調子は灰色の明るい青を呈す。幕末から明治初めで瀬戸・美濃系と思われる。18) 端反りする口縁に鉄釉がけ。器外面は文字文。全体に肉薄である。釉調は透明。呉須の発色は鮮やかな青。幕末から明治初めで瀬戸・美濃系と思われる。19) 器外面は18と同様文字文。疊付は鋭角的に尖がる。呉須の調子は深い青色を呈し、釉調はやや青味がある。見込は花文か。幕末から明治初めで瀬戸・美濃系と思われる。20) やや端反りする口縁で、器外面には、格狭間に松・竹・梅を施す。器下半が肉厚となる。口縁内側は連続文の縁絵。釉調は透明。呉須の調子は鮮やかな青色を呈す。幕末から明治初めで関西系と思われる。21) 口縁は直線的に開く。器外面は、線描による草花の周辺を濃絵付で埋め、文様部を白メキにし、亀甲つなぎ文で区切る。口縁内側は市松風の縁絵。器外面の腰に隆起線が走り、その端部は鉄釉を施す。隆起線と高台との間は雲龍文の染付で埋める。高台外面は柳高台となっている。疊付のみ露胎しており、なめらかに調整されている。釉調は透明で呉須の調子は深い青である。明治から大正で肥前系と思われる。22) 端反り碗蓋である。外面に花文を内面に雷文の縁絵で見込に松竹梅を施し、高台内に字銘有。釉調は透明。呉須の調子は深い青である。明治で肥前系と思われる。23) は下半に肉厚のある浅碗である。赤絵で横縞の上絵付を施しており、見込に上絵付で字銘の一部が認められる。横縞は5本で口縁内側にも1本描かれる。釉調は透明。幕末から明治で肥前系と思われる。24) 端反りの碗である。湯溜りは肉薄である。器外面は松文を濃絵付する。釉調は青味が強く、呉須の調子は明るい青色を呈す。見込に足付ハマ痕が有る。疊付は露胎し、この部位の破面は乳赤色を呈す。明治で肥前系と思われる。25) 型紙摺で、端反りの認められない碗である。器外面は、窓絵に蝶を追う唐子を描き、口縁近くは菊文を、さらに全面を青海波で埋める。口縁内側は輪宝を巡らす。釉調は透明、呉須の色調は紺に近い。明治10年から大正と思われる。26) 端反りの無い飯碗で、内外面とも同じ文様の型紙摺で、口縁に輪宝を、下位に松を中心に蝶を追う唐子が三面に配される。型紙摺後、部分的に濃絵付を行なう。外面高台近くの文様は連弁の簡素化されたものである。釉調は透明で、呉須の調子は深い青である。明治10年から大正と思われる。27) 高台内の湯溜り部が非常に肉厚の飯碗である。器外面は花牡丹と葉を線描の後濃絵付する。疊付は露胎する。釉調は透明で呉須の調子は、鮮やかな青である。明治後半から大正で関西系あるいは瀬戸・美濃系と思われる。28) 端反りの強い浅い碗である。銅板転写による釉下彩で、桜花はクロム鉄。葉及び流水は染付である。釉調は透明である。疊付は焙着痕があるが、釉刺されている。明治後半から大正と思われる。29) 全体が肉厚で、釉下彩の銅板転写による飯碗である。器外面には、蕨草文の染付と、クロムによる緑色で彩色。釉調は青味があり、疊付のみ露胎する。明治後半から大正と思われる。30) 釉下彩で銅板転写による飯碗である。器外面にはニッパを、クロムによる緑色と呉須で彩色を行う。釉調は若干青味がある。明治後半から大正と思われる。31) 全体が肉厚の釉下彩銅板転写による飯碗である。器外面に菊花などをクロムによる緑色と呉須で彩色を行なう。釉調は透明。明治後半から大正と思われる。



第24図 皿類 1 (灯明皿)

。皿類 (第24図～第26図)

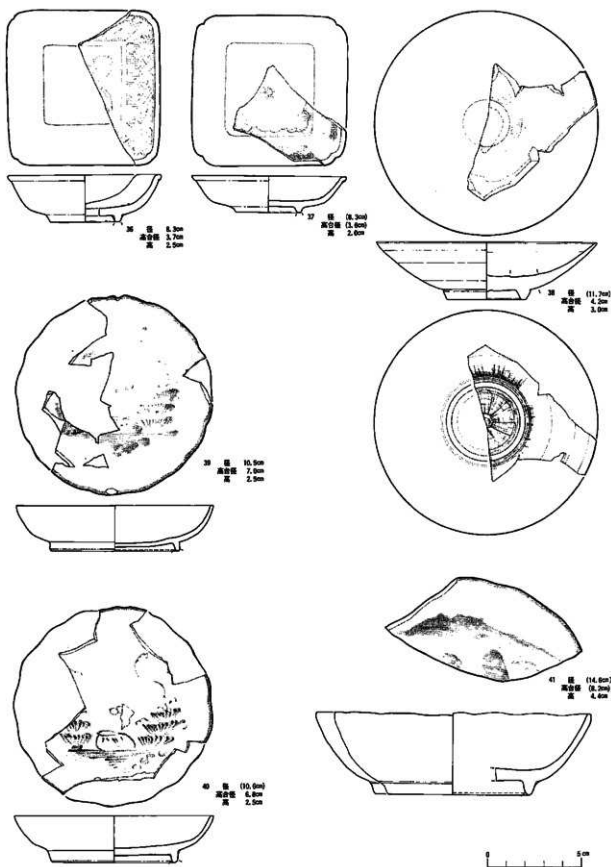
皿類は、主として灯明、手塩、小皿、大皿などがある。

灯明皿 (第24図)

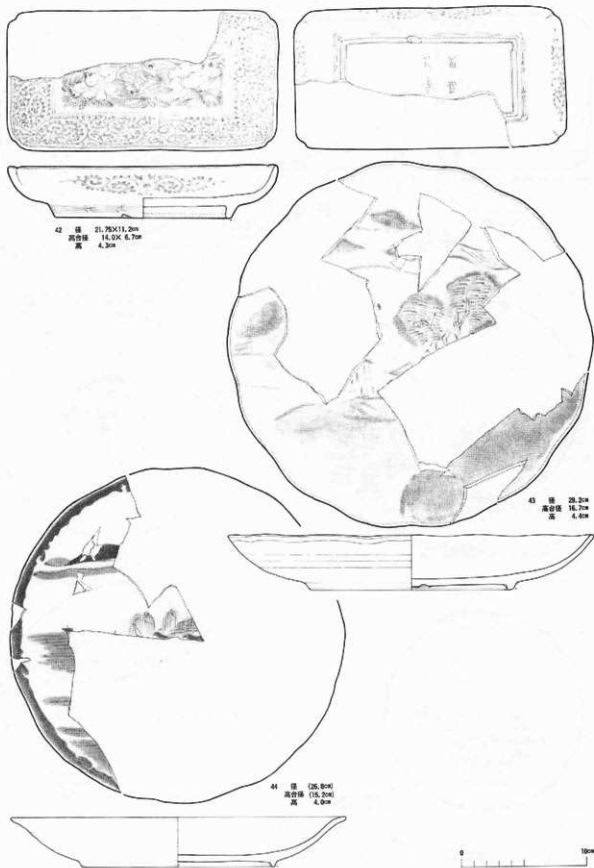
陶製 32) 陶製で、皿内面及び外面は口縁までを、そして畳付が施釉される。外面の削りは荒いが内面は入念に仕上げ、釉厚がある。口縁端部は肥厚する。高台は貼付高台で、器の見込部がやや盛り上がる。灰釉を施す。釉調は淡緑みがある。胎土は砂粒に富む。18世紀代の瀬戸・美濃系と思われる。33) 陶製で二重縁となっており、内側縁の断面形は鋭角に尖がり端部は露胎する。外面は口縁より底部が露胎し、甚奇底である。外面中位には、重焼時の下段にあった二重縁皿の内縁端の釉が付着する。酸化炎で焼かれたとみられ、器外面は薄赤色を呈する。灰釉で、器面には細かな貫入が認められる。釉調は淡緑みがある。18世紀代の瀬戸・美濃系と思われる。34) 陶製で、内面及び外面口縁部まで施釉される。外面は露胎し、32同様薄赤色を呈する。外面中位には重焼時の下段にあった二重縁皿内縁の接触部が灰色の線となって残る。見込には足付ハマ痕がある。また釉掛部には細かな貫入が認められる。釉調は灰色を呈する。18世紀代で瀬戸・美濃系と思われる。35) 吸水性があり、胎土は赤褐色を呈する。器内面は透明釉が施釉され肉薄である。底面は回転糸切痕がある。関西系であろうか。

手塩皿 (第25図36・37)

内外面型打ち 36) 白磁角皿で、内外面とも型打ちである。器内面は、四方棒などが繊細な線でレリーフされる。畳付は釉をふき取る。釉調は青みが強く、胎土と釉界面は明瞭である。胎土は精良。幕末から明治初期、瀬戸・美濃系と思われる。37) は染付角皿で、内外面とも型打



第25圖 皿類 2



第26図 皿類 3 (大皿)

ちである。器内面は波文で、中央は菊文がそれぞれレリーフされており、部分的に濃絵付される。畳付は軸をふき取る。釉調は青みがあり、界面は不明瞭。胎土は精良光沢がある。幕末から明治初期、瀬戸・美濃系と思われる。

見込軸刺丸皿 (第25図38)

38) 染付小皿で、器下半は肉厚である。見込は蛇ノ目軸刺ぎで、軸刺ぎ部にアルミナ砂塗布。外面は高台付近まで軸掛けする。断面台形状に削り出された高台部には、カンナ痕が残る。アルミナ砂痕がある。釉調は乳白色でやや青みがある。口縁から下方に軸だれする。呉須の調子は薄い灰青色を呈し、発色は悪い。露胎部は赤味を帯びている。18世紀後半、肥前産と思われる。

型打ち丸皿 (第25図39～41)

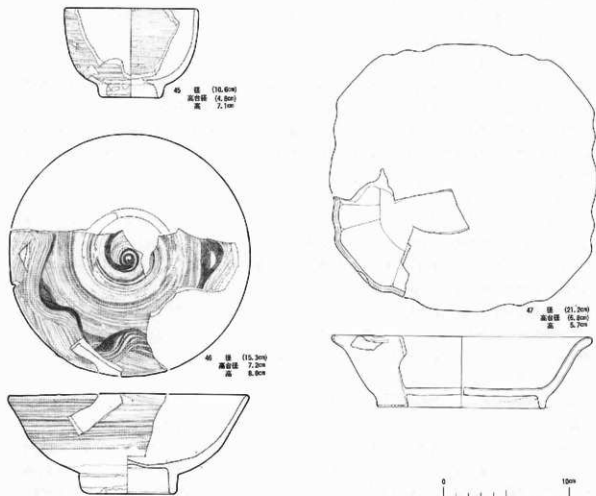
39・40) は同一文様・形態を有するもので、口縁に鉄軸を施し、見込みには線描きに濃絵付を施す。高台部外面には縦方向に刷毛目状の削り痕が認められ、畳付は露胎する。型打ちは内面のみ行なう。釉調は39が暗く、40は明るい青緑色を呈す。呉須の調子は、39が緑灰色で40が青灰色となる。19世紀の初頭から幕末で肥前系と思われる。41) 内面型打ち成形の中皿である。口縁に鉄軸を施し、見込みに呉須で山水を線描し、濃絵付される。高台部内側は蛇ノ目凹型で、畳付より内側は露胎する。釉調は青緑味が強く、呉須の調子は濃い青である。19世紀初頭から幕末で肥前系と思われる。

型打ち大皿 (第26図42～44)

42) は角皿で、糸切り貼付高台を有す。器外面は、蛸唐草のシンメトリイ文様で、高台外面は雷文である。口縁内側は、蛸唐草で埋め、見込み部は、2対の花牡丹を線描きに濃絵付する。高台内は「富貴長春」の字銘有り。釉調は、青緑味が強く、呉須の調子は明るい青色を呈する。18世紀後半で肥前産と思われる。43) は丸皿で、高台内側にハリ支え痕有り。器内全面に山水を描く。線描と濃絵付は全体が滲む。化粧土掛けを行なっている。畳付けは軸刺ぎされている。釉調は青緑みが強く、呉須の調子は明るい青色を呈す。19世紀前半から幕末で肥前系と思われる。44) は、43同様、高台内側にハリ支え痕有り。口縁内側は濃で塗りつぶし、全面に山水を描く。絵柄は、線描と濃絵付で行なわれる。濃は3種程あり、部位によって塗り分けている。口縁の内外面素地には、化粧土の溜りが口縁から下方に流れている。高台畳付は軸刺ぎされ、アルミナ砂痕がある。釉調はやや青味があり、呉須の発色は良い。19世紀前半から幕末で肥前系と思われる。

鉢類 (第27図45～47)

45) は陶製の鉢である。不透明白釉で刷毛目文様を描き透明釉を上掛けしたものである。器内外面は横方向の刷毛目文様で、刷毛目部は黄白色、軸掛部は淡茶色を呈する。高台内も施釉され、軸掛け部に貫入が認められる。畳付は露胎し、赤褐色を呈する。18世紀前半で唐津系と思われる。46) はやや端反りぎみの口縁を有する陶製鉢である。不透明釉で器内面に波状の刷毛目文様を描き、外面は平行文様で、器内面と外面は腰まで透明釉を掛け。畳付は鋭角的に削られ、アルミナ砂痕がある。湯溜り部は極めて肉薄に整形されている。露胎部は茶褐色を呈し、透明釉軸掛部は暗褐色、不透明釉部はやや緑がかった薄茶色を呈する。見込みは蛇ノ目状に釉がふき取られるが、充分ではなく、重焼痕がある。またこの部位には、アルミナ砂痕がある。18世紀末から幕末の唐津産と思われる。なお唐津



第27図 鉢 類

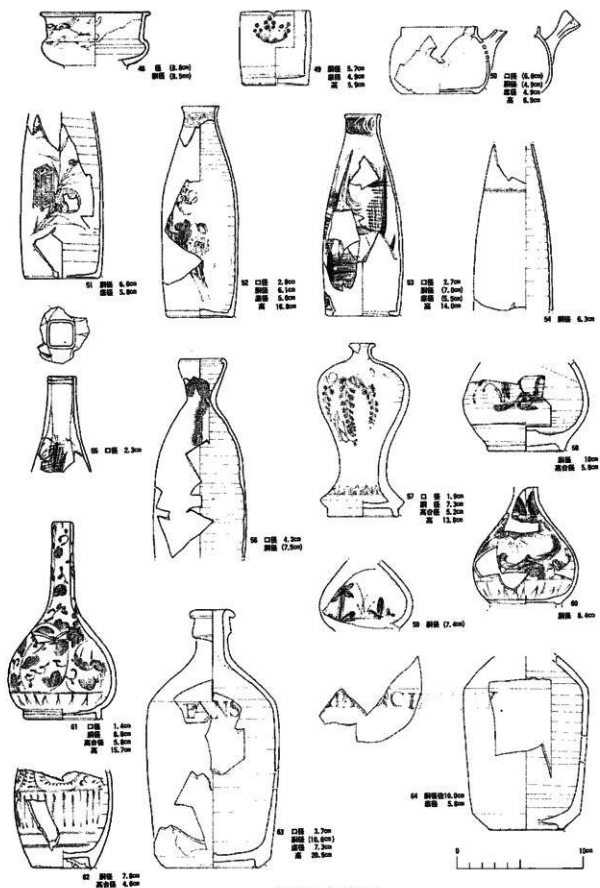
に関しては図の上で、不透明軸掛部を墨塗りにしており、実際の色感とは白黒が逆になる。
47) は青磁角鉢である。端反りが強く全体に肉厚である。厚く軸掛けされる。高台は露胎
布目高台 高台内は透明な軸掛けである。高台は貼付け高台で、高台内に布目が認められる。幕末
から明治初頭の瀬戸・美濃系と思われる。

・香炉 (第28図48)

線 描 染付で陶質の香炉である。器外面は、頸部に雨龍文を線描する。内面は口縁まで施釉し、
内部は露胎する。軸調はやや青緑みが有り、呉須の調子は暗い青である。19世紀初頭から
幕末の肥前系と思われる。

・火入れ (第28図49)

白色釉薬 円筒形で陶質。甚荷底である。白色釉薬を上掛けする。呉須描きの横線は釉下彩で灰青
アルミナ砂 色を呈するが、桐文の花部は釉がはじかれ、黒色を呈する。底部はアルミナ砂が付着する。
19世紀初頭から幕末で、肥前系と思われる。



第28図 瓶類ほか

・急須 (第28図50)

梅鉢文 白磁の急須で、全体に肉薄である。器内面に梅鉢文を金彩で施文する。また、梅鉢文の
金 彩 対側は「市」の字の一部が認められ、取手端部にも金彩が施される。蓋受け部は露胎する。
釉調は透明で胎土精良。明治期以降と思われる。

・瓶類 (第28図51～61)

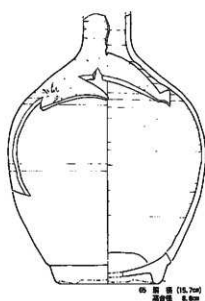
51～56) はいわゆる燭徳利であり、51～55) までは磁器である。底部は甚苟底で露胎する。
内面は、口縁付近までが施釉され、下位は露胎する。51) は口縁が欠損する。胴部中
位に置と印翳と薄が線描に濃絵付される。釉調は透明で、呉須の調子は鮮やかな青である。
幕末から明治と思われる。52) は、端反する口縁に雷文を、胴部に草花と蝶を線描きに濃
絵付される。釉調は透明。呉須の調子は明るい青である。幕末から明治と思われる。53)
は端反りする口縁に流水を、胴部には水辺風景を濃絵付する。釉調は透明、呉須の調子は
鮮やかな青である。幕末から明治と思われる。54) は胴部上位に横線を2本入れ、口縁と
底部は欠損する。釉調は透明で、呉須の調子は鮮やかである。明治以降と思われる。55)
は角形の口縁で、垂直に立つ。釉調は透明で呉須の調子は鮮やかである。56) は陶製で、
緑色釉下彩 口縁は大きく開き、釉下彩で緑色が施され、胴部外面は淡茶色を呈する。18世紀後半から
関西系 19世紀前半で、関西系と思われる。

御神酒瓶 (第28図57～62)

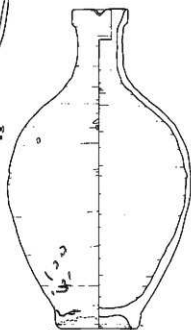
57～62) はすべて内面が露胎する。57) は疊付を除き施釉され、内面は露胎する。胴部
は藤文を、高台上位に蓮弁を施す。全体に肉厚である。釉調は青味が有り、呉須の調子は
肥前産 明るい青である。18世紀から幕末で肥前産と思われる。58) は鶴首が欠損し、胴部に華文
砂目積痕 が描かれる。高台には砂目積痕があり、胴部外面にクロ口痕が認められる。釉調は青緑み
があり、呉須の調子は明るい青である。18世紀前半から1780年代までの肥前産と思われる。
59) 鶴首が欠損し、胴部は一側面に若松を描く。釉調は青緑みがあり、呉須の調子は暗い
菊唐草文 青を呈する。18世紀中～後半にかけての肥前産と思われる。60) は胴部に菊唐草文を、下
半には蓮弁文を施文する。前2者に比べ肉薄である。釉調は青緑みがあり、呉須の調子は
暗い青である。18世紀中～後半の肥前産と思われる。61) は菊唐草文を全面に施し、胴部
下半に蓮弁を配す。疊付のみ露胎し、高台内は肉薄である。内面の頸部に鶴首部つき痕が
認められる。釉調は青緑みがあり、呉須の調子は灰青色を呈す。18世紀中から後葉にかけ
ての肥前産である。62) は胴部上半が欠損し、外面上半に菊唐草を、下半に蓮弁の変形文
を配す。疊付は露胎し砂目積痕がある。釉調はやや青みがあり、呉須の調子は明るい青色
を呈す。18世紀末から幕末にかけての肥前産である。

コンブラ瓶 (第28図63・64)

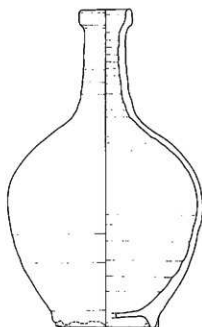
陶質で、器内面は露胎する。63) は胴部の肉厚が64と比べ薄い。口縁の作りは、上段が
アルファベット 玉緑で下半は玉緑が省略されている。胴部下半は光沢が無い。肩にはアルファベットが呉
須描きされ、「— PANS —」が読める。胴部下半が肉厚となる。疊付のみ露胎する。白色
波佐見産 不透明釉で、灰白色を呈す。呉須の調子は灰青色を呈す。19世紀代の波佐見産と思われる。
酒 瓶 64) は、首が欠損しており、肩に「JAPANESE SCHNAPPS」が読みとれ、酒瓶であるこ
とが判る。底部は肉薄となり高台も低い。疊付は露胎し、削痕がある。胎土は精良で磁質
である。釉調はやや青味が有り、呉須の調子は灰青色を呈す。19世紀代の波佐見産である。



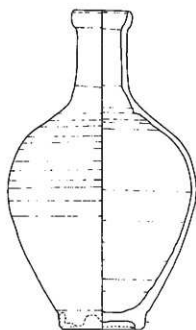
66 口径 15.7cm
肩径 8.8cm



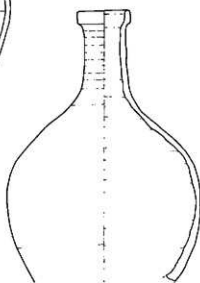
67 口径 4.4cm
肩径 14.0cm
底径 6.3cm
高 25.5cm



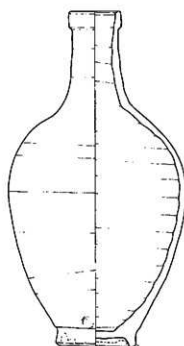
68 口径 3.7cm
肩径 18.4cm
底径 6.8cm
高 25.3cm



69 口径 4.2cm
肩径 18.0cm
底径 6.9cm
高 25.9cm



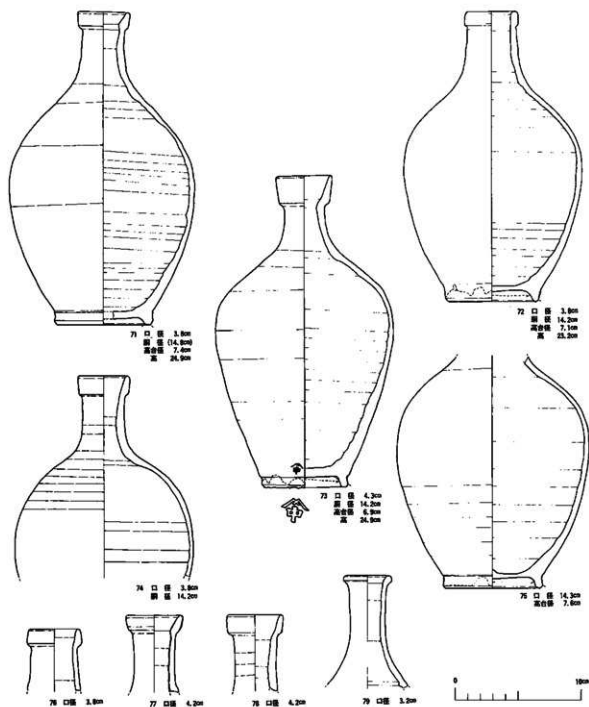
70 口径 3.7cm
肩径 18.4cm



71 口径 3.9cm
肩径 14.1cm
底径 5.8cm
高 25.7cm



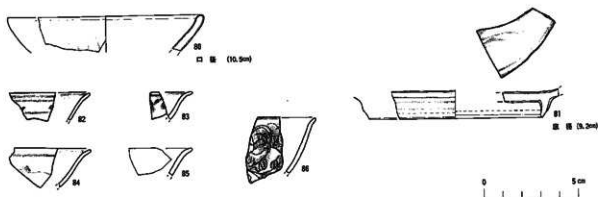
第29图 德利 1



第30図 徳利 2

・徳利 (第29・30図)

文 65) は肥前系の徳利で、首が欠損する。肩から胴部にかけて呉須で笹文を施す。畳付と器内面が露胎する。高台径が広く、高台部破面は赤褐色を呈する。釉面は白色釉で、呉須の調子は灰青色を呈す。幕末と思われる。66) はやや広がる口縁である。首が長く、胴部の最大径は器高の下半にある。器外面は薬灰釉掛で内面は鉄釉である。畳付は露胎し、赤褐色を呈する部位がある。外面全面に貫入が認められ高台部に釉だれする。胎土は灰色を呈し粒子は荒い。67) 首が短く肩が高い。口縁が「V」字状に切られている。器外面は



第31図 中国磁器

葉灰釉で内面は鉄釉である。高台径が小さい。68)は首が太く、外面は葉灰釉で内面は鉄釉である。65・66は疊付の削りが丸味を帯びているのに対し、68は疊付が面取され幅広く平坦に削られている。胎土破面は暗褐色を呈す。69)は内外面とも鉄釉で、肩部は白化粧土をかける。高台部は鋭角的に面取され疊付の幅が狭い。高台上部に押印が認められる。底部にアルミナ砂が付着。胎土は暗褐色を呈す。70)は大きく張る肩部を有する。器外面は葉灰釉・内面は鉄釉で、胎土は暗灰色を呈す。底部は欠損する。71)は、肩の丸い器形で、器外面は粗粒釉で内面は鉄釉である。高台疊付は面取されており、露胎する。全体に肉薄である。胎土は明るい灰色を呈する。72)は首の短く全体にずんぐりとした特徴的な器形で内外面とも灰釉をかけ内側は鉄釉が混ざる。全体に肉薄で高台は面取され露胎する。露胎部の色調は赤褐色を呈し、胎土破面は暗灰色を呈する。73)は口縁の造りに特色があり首も短く、器内外面に灰釉がかけられる。高台は面取される。疊付は露胎し、明茶色を呈し、胎土破面は明灰色を呈する。なお、高台上位に屋号が押印されている。74)は肩部が球形を呈すもので、内面は鉄釉を、外面に灰釉が掛けられる。胎土破面は明灰色を呈する。75)は全体に肉薄で内外面とも灰釉が掛けられる。高台は面取され、疊付は露胎する。胎土破面は灰色を呈する。76)～79)はそれぞれ特徴的な口縁を示す。76)は内面がほぼ垂直な口縁で、77)は口縁が「く」の字形に開くもの。78)は口縁内面に段差が付き上位に開く口縁で、79)は口唇に向ってゆるやかに開き玉縁である。

疊付面取
白化粧土
押印
粗粒釉
肉薄
灰釉

・中国磁器 (第31図)

中国磁器は、非常に点数が少なく、図示したものがすべてである。青磁皿、染付皿・碗、粉彩碗などがある。80)は蓮弁の削りが浅い青磁皿で、14世紀末～15世紀中葉のものと思われる。81)は染付皿で、草文の一部が認められる。高台は内向し、疊付は鋭角的で、高台脇及び疊付は露胎する。釉調は青味があり呉須の調子は明るい青色を呈す。82～84)も同時期の端反り皿で、15世紀後半から16世紀初頭と思われる。85)は端反りの白磁皿であろうか。86)は19世紀清代の粉彩不透明釉によるいわゆる十錦手碗である。端反り口縁は無釉で口鏤を施す。器外面は型造による沈線が認められる。全体は黄の粉彩色釉で、その上に鉄釉による線描きを、つぎに花部は赤の粉彩色釉を施し、赤と黄の色釉の表面は光沢がある。葉の緑は上絵付され表面に光沢が無い。器内面に絵付は無く、やや青味のある釉掛である。胎土は精良でやや光沢がある。

青磁皿
染付皿
白磁皿
十錦手碗
型造

(2) 煉瓦 (第32図)

押印 明治初期、茂辺地で焼かれたものである。押印が認められるものを図示した。87) には「造」、88) には「森口製造」、89) には「年」などの文字が見られる。茂辺地の煉瓦は、明治5年から13年まで開拓使が生産したが、同14年には、茂辺地村森兵五郎に施設を貸与したといわれ、88) の刻印は、森兵五郎時代の可能性がある。

(3) 木杭 (第32図)

SX-2 (稲荷社) より検出されたものである。90~92) までは稲荷社の基台柱で、90) ヒバを除いて面取された柱材を使用する。90) は丸太状で、一部面取される。90)・91) はヒイチイバで、92) はイチイである。93~95) は比較的細い丸太材を使用している。93)・94) はカラマツヒバで95) はカラマツを使用している。

(4) 金属製品

・銭貨 (第33図)

中国銭—最も古いものは「開元通宝」で、初鑄は621年である。北宋銭のうち新しいものとしては、「紹聖元宝」の1094年がある。8) は、SB-3 (拝殿) の柱穴5の覆土から検出されたものである。これらの中国銭は、寛永通宝とともに出土している。

国内銭—16) の永楽銭は国内鑄造と思われる。17) は古寛永で、18) は江戸十萬坪。19) 加工銭は加工銭で、銭の縁を8角形に整形してる。文久永宝は何種類か出土している。24~27) は産地の明確なものでそれぞれ背面に産地を示す文字が認められる。金銀銭は、天保二朱判金と文政一朱判金そして文政南鐐一朱銀が出土している。

・鉄製品 (第34図)

釘類— (1~17) 1寸~4寸までが出土しており、曲がったものが多い。建物の解体時などに捨て去られたものか古材を焚木にした際に残されたものであろう。

舟釘— (18~24) 偏平で、全体がゆるやかに曲がったものがある。21~24) は断面形が方形に近いもので、貝折釘と呼ばれるものであるが、舟釘のグループに入れた。

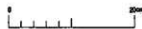
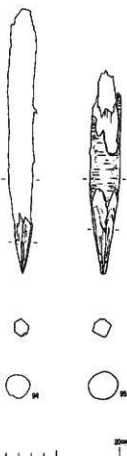
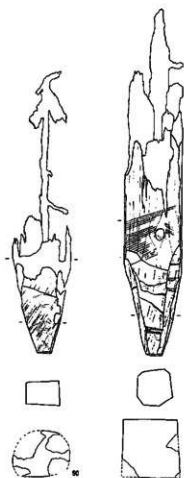
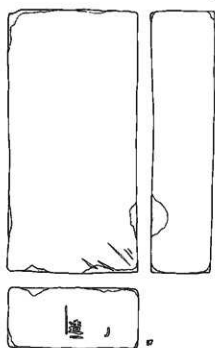
鑿— (25) 断面が円形に近くなるよう鍛造整形される。基部は欠損する。

鉋— (26~32) 2寸から4寸までのものがあり、八の字に開いているものは、使用済みのものであるであろう。32は釘部が極端に短い。

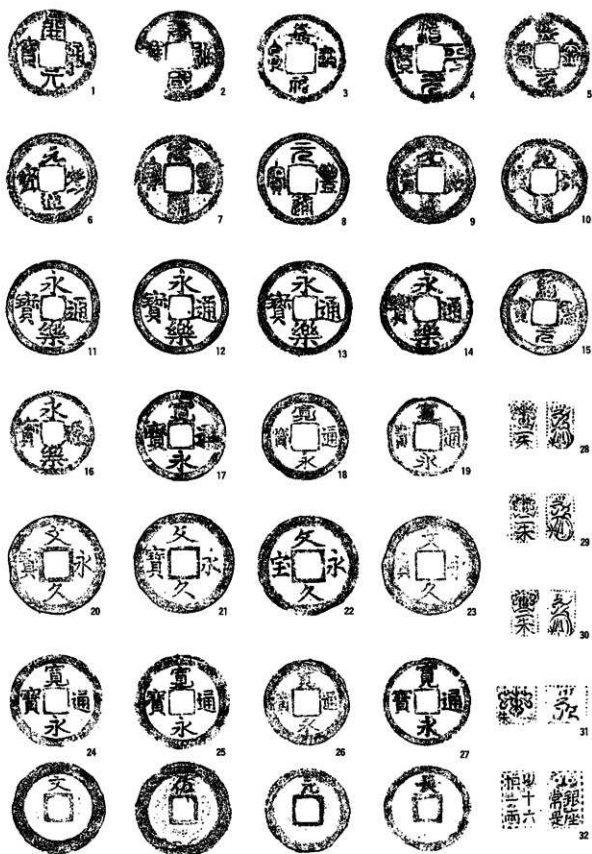
その他 (33~39) 33) は板状で両端が直角に曲がる。34) は小刀で片刃である。目釘穴は認められない。35) は和鉄である。36) は栓で、白磁の栓に鉄線を通す。37) は鉋あるいは飾り金具であろう。38) は鑄造の脚で、組み物の一部と思われる。39) は刃部が直線的に造り出され半月形を呈する鎌である。

・銅製品 (第35図1~30)

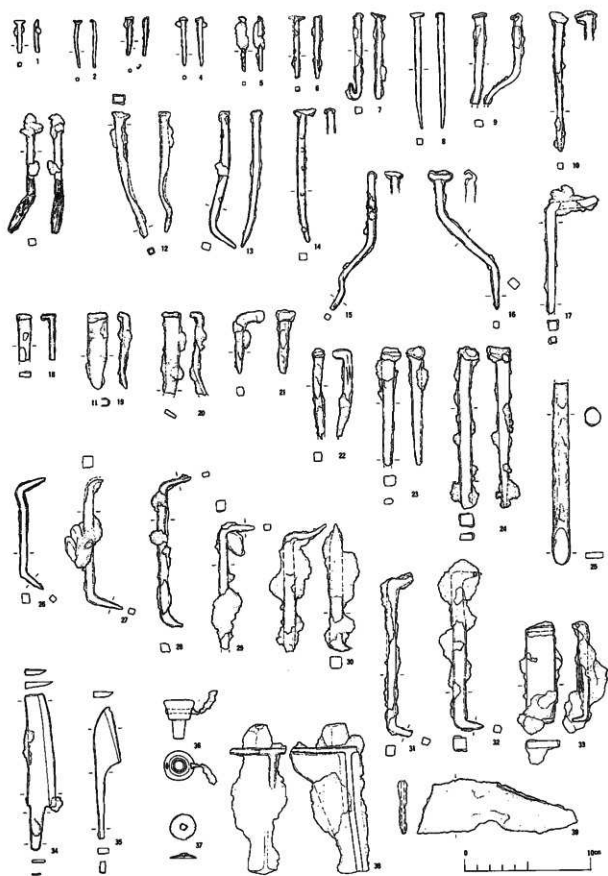
煙管 (1~4) は「煙管」で、雁首1~3) と吸口4) とがある。1) は煙管上面に継目がある。5) の鈴は非常に肉薄である。6) は飾り金具で、一部鍍金される。7) は銅輪である。8) は板状で、端部に角釘を3ヶ所打った痕がある。9) はハバキガネである。10)



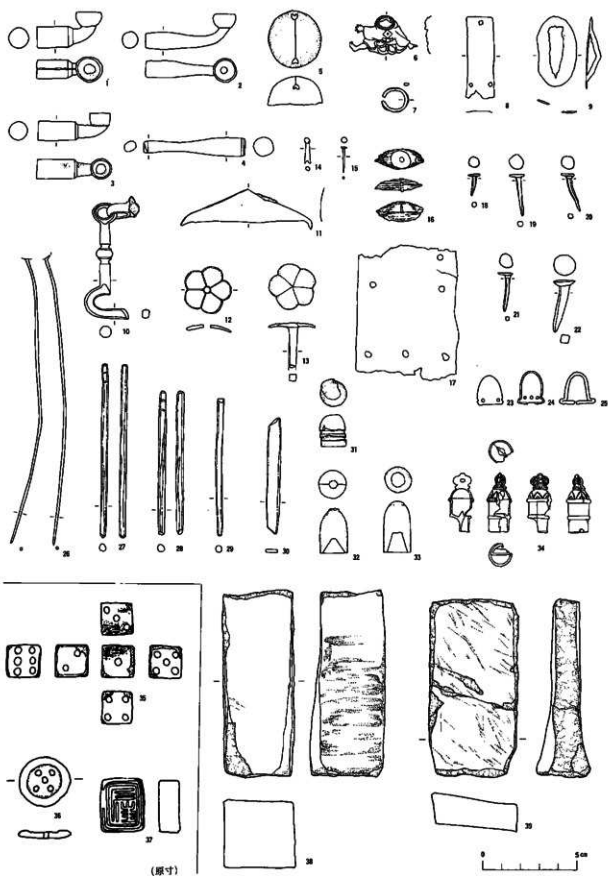
第32図 煉瓦・木杭



第33図 銭貨 (すべて原寸)



第34図 鉄製品



第35図 銅製品ほか

は鉤で、鋳造である。12・13)は飾り鉄である。14)は中空の細工物である。15・16)は銅釘で、16は笠形の鉄金具が付く。17)は板状で端部に6ヵ所穿孔が認められる。18~22)は頭の大きい釘と思われる。23~25)は小鉤で、3種認められ、23のタイプが最も多く出土していた。26)は、^{かんざし}簪で、頭部が欠損する。上端部は折断している。27, 28)は棒状で、端部に刻みが認められる。 簪

○その他の遺物 (第35図31~39)

(31~34)は鉛製品である。31~33)は銃弾で、32・33)は基部が円錐形に窪む。34)は銅弾子。35)は簀子で馬骨製と思われる。36)は木製ボタンで5個穴がある。37)は陶印である。38・39)は砥石である。38)は3面が、39)は2面が使用されている。 銃弾 簀子

(5) 遺物小括

この小項では、陶磁器と金属製品などの主な特色を述べるとともに、陶磁器と銭貨の分布状況にもふれたい。

○陶磁器

徳利を除いては、いずれも個体数が少なく、生産・流通の傾向を認めるまでは至らなかった。そこで、各器種ごとの生産年代と産地などを概説する。

碗は、19世紀前半~明治にかけて瀬戸・美濃系が圧倒的に多い。肥前産では、18世紀末~19世紀前半のものが若干あり、明治~大正期になると轡高台や赤絵上絵付などがある。産地は不明であるが、クロムによる緑釉の碗は、神社の移築時期の大正6年までは年代が下りそうだ。 瀬戸・美濃系

皿類は、18世紀代の灯明皿や、19世紀~幕末にかけての手塩皿など瀬戸・美濃系の日常雑器が主である。肥前あるいは肥前系のものは、18世紀後半の見込軸刺の丸皿や、18世紀末~19世紀前半に大量生産された染付大皿、19世紀~幕末の内面のみ型打ち成形の輪花皿などがある。また、大皿には化粧土が塗られているものがある。 肥前染付大皿 化粧土

鉢類は、18世紀前半の刷毛目小鉢や、18世紀後半~幕末にかけての刷毛目鉢など唐津系の製品や瀬戸・美濃系の青磁鉢があり、それぞれ出土点数は極めて少ない。

香炉、火入れなどは非常に個体数が少なく、時期は19世紀代で肥前系のものである。

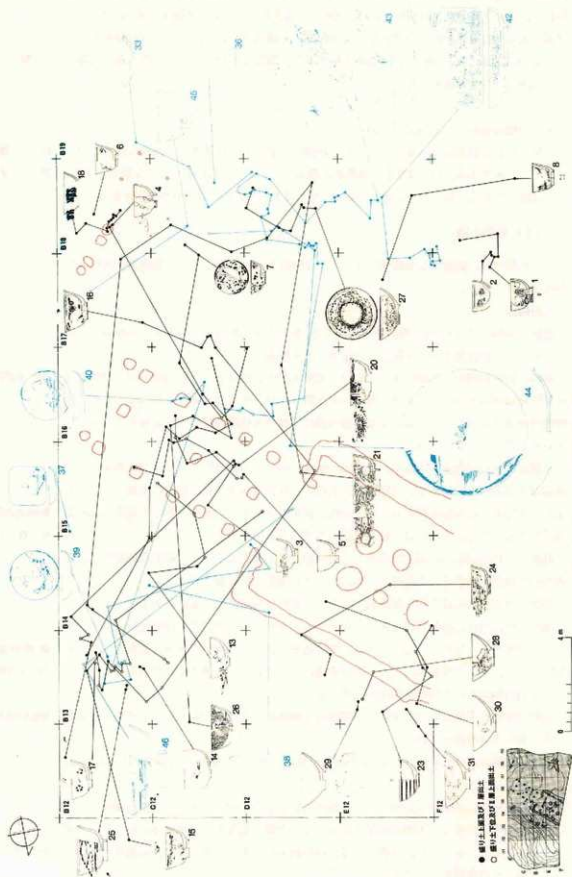
瓶類・燗徳利は、磁製では幕末から明治までのものが多く陶製では18世紀後半から19世紀前半の関西系と思われるものがある。御神酒瓶は、すべて18世紀後半の肥前産であり特徴的である。コンブラ瓶は、これまでに道南においていくつか検出されているが、これらとほぼ同時期のもので19世紀代佐佐見産である。 御神酒瓶 コンブラ瓶

徳利は産地の不明なものが多いが、関西系で東北産のものがかなり流入していると思われる。肥前系は数が少ない。 関西系東北産

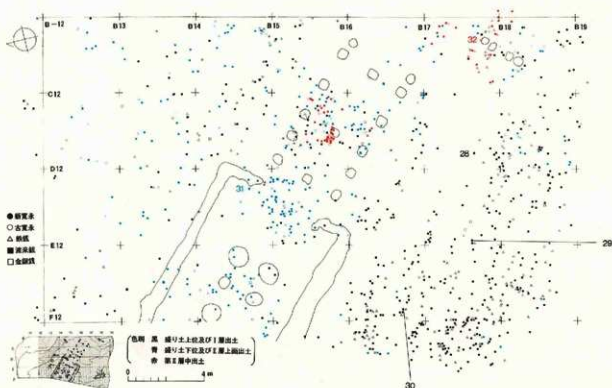
中国陶磁器は個体数が少ないが、矢不來館で採集されている資料と共通性が認められる。

○金属製品など

銭貨は圧倒的に寛永通宝が多く、その中でも新寛永が9割以上を占める。釘類は舟釘が目立つ。銅製品の多くは本殿に関係する品々で、本殿の修復あるいは解体が行なわれた可能性を示唆している。また、銃弾などは、箱館戦争時のものと考えられ、天満宮の北、矢不來台場はその激戦地として知られている。 箱館戦争



第36図 碗・皿・鉢類分布状況



第38図 銭貨分布状況

。陶磁器の分布

遺物は、建物跡を中心にほぼ全域に分布しているが、調査区の北はずれでは稀薄になる。以下おおまかな分布状況を述べる。

**盛り土下位
斜面に散在** 18世紀後半から幕末ぐらいの碗や御神酒瓶などは、盛り土下位に残っている例があるものの、多くは斜面に散在しており、SB-3（拝殿）構築時に、SB-1（拝殿）時の敷石などが整理され、その際に遺物も土砂とともに斜面に押しやられたものと考えられる。また、幕末から明治にかけての遺物は、手水鉢や古木周辺などに特に集中し、手水鉢の構築された年代と関係するものと想定される。一部の徳利などはほとんど移動していないことなどから、最も新しく明治～大正ぐらいの時期に、投棄されたものだろう。また、建物南側の御神木周辺には、比較的新しい時期の遺物が分布する。

。銭貨の分布

御神木周辺 銭貨は、建物南側や御神木周辺より出土する例が多く、SB-3（拝殿）盛り土より出土する例は少ない。盛り土下においては、遺構部、特にSB-2（本殿）とSB-1（拝殿）と、両者の中間部の3カ所に比較的多く出土している。なお、銭の種類によって分布に特別な偏りはみられない。

V 各種分析

1 完新世の火山灰について

本遺跡では、黒ボク土中に三層の降下火山灰が認められた。これらは、下位から上位へ、**三層の火山灰**
黄～黄褐色シルト質火山灰、砂質火山灰、及び白色シルト質火山灰である(第39図)。こ
こでは、他地域の火山灰との対比、噴出源推定、及び遺物・遺構の編年のための基礎資料
とするために、主に鉱物組成上の記載を行う。なお、三層の火山灰とも、18世紀以降の柱 **鉱物組成**
穴によって切られている(第IV章参照)。

試料の処理

火山灰試料を以下の手順で処理し検鏡した。水洗→6% H_2O_2 ・10% HCl 処理→水洗
→乾燥→篩分け→粒径1/4～1/8mmについてカナダバルサムを封入剤としてプレパラートを
作成→偏光顕微鏡下で300粒以上を検鏡→各鉱物の量比を粒数%で表わす(第39図)。

火山ガラスについては、形態分類と浸液法による屈折率測定を行った。火山ガラスの形 **火山ガラスの形態**
態は、粒子全体の形状、気泡の形状と大きさ等によって以下のように分類した。

F型：扁平で、気泡あるいは泡壁が繊維状に細長く平行に伸びているもの。

L-C型：気泡が破砕し、泡壁がridgeをなして直線～曲線状に数本走るもの。

M型：気泡と泡壁のつくる模様が網目状に見えるもの。気泡はほぼ球形。

N型：扁平または塊状で、針状の模様が認められるもの。針状の微小結晶を包有するこ
とが多い。

P型：薄い平板状。

UT：未分類。

各火山灰の特徴

黄～黄褐色シルト質火山灰：断続的に産出する。層厚3.5cm、厚い箇所では6～9cm。本
火山灰は全て火山ガラスから成り、L-C型に富む。火山ガラスの屈折率は、1.502～ **火山ガラス**
1.520である¹⁾。粒径1/8mm>では、少量のアルカリ長石と斜長石を含む。

砂質火山灰：断続的に産出する。層厚1～2cm。本火山灰は主に斜長石から成る。重鉱 **斜長石**
物量は34.3%で、角閃石>不透明鉱物(鉄鉱物)>単斜輝石≈斜方輝石。単斜輝石比(単
斜輝石量/全輝石量)は0.55。淡黄灰色・白色の軽石を含む。

白色シルト質火山灰：斑点状あるいは断続的に産出する。層厚4cm±。本火山灰は火山
ガラスに富み、斜長石と少量の重鉱物を伴う。火山ガラスはほとんどM型から成る。火 **火山ガラス+α**
山ガラスの屈折率は、1.501～1.506である。重鉱物量は5.8%で、斜方輝石>不透明鉱物
>単斜輝石。単斜輝石比は0.07。

他地域の火山灰との対比

佐々木ほか(1970)・北海道火山灰命名委員会(1982)によれば、渡島半島部には渡島
大島・駒ヶ岳・恵山の各火山起源の火山灰が分布し、本遺跡は、「Os-b」・「乙部層」・
「Ko-白ハン」・「Ko-e」等の分布域に入っている。これらの火山灰と本遺跡の火
山灰との関係は未詳である。

一方、本遺跡周辺の発掘調査によって報告された火山灰と本遺跡の火山灰とは、色調・
粒度・層厚・鉱物組成・火山ガラスの形態と屈折率等から、以下のように対比される。 **火山灰の対比**

黄～黄褐色シルト質火山灰：札前遺跡の「黄白色火山灰層」、札前遺跡の「St-c火山灰」、建川2遺跡と新道4遺跡の「Sm-c」、及び矢不來2遺跡の「Yf-b」(町田, 1985; 北海道埋蔵文化財センター, 1986 a・1987 a・b)に対比される。この火山灰は、町田ほか(1981)・町田ほか(1984)・町田(1985)及びArai *et al.* (1986)の「白頭山-苫小牧火山灰」である。

砂質火山灰：札前遺跡の「St-b火山灰」及び建川2遺跡と新道4遺跡の「Sm-b」(北海道埋蔵文化財センター, 1986 a・1987 b)に対比される。

白色シルト質火山灰：湯の里3遺跡の「Yn-b火山灰」、札前遺跡の「St-a火山灰」、建川2遺跡と新道4遺跡の「Sm-a」及び矢不來2遺跡の「Yf-a」(北海道埋蔵文化財センター, 1986 a・b・1987 a・b)に対比される。「Sm-a」は、「Sm-a₁」と「Sm-a₂」の二層に細分されている。本遺跡の白色シルト質火山灰は、粒度、火山ガラスの量比と屈折率から、「Sm-a₂」に対比される。佐々木ほか(1970)の「乙部層」は火山ガラスに富む火山灰で、本火山灰に対比される可能性がある。

まとめ

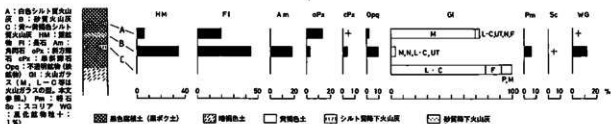
三層の火山灰のうち、黄～黄褐色シルト質火山灰は、800～900年前の「白頭山-苫小牧火山灰」(町田, 1981等, 前出)に対比される。砂質火山灰と白色シルト質火山灰は、目下のところ追跡調査が不十分である。後者については、細粒均質であることから広域に分布している可能性があること、及び「乙部層」に対比される可能性があることを指摘しておく。

注) 1. 測定中に暗褐色の火山ガラスが1個認められた。この粒子の屈折率は1.520である。

引用文献

- Arai, F., Machida, H., Okumura, K., Miyaschi, T., Soda, T. and Yamagata, K. (1986): Catalog for late Quaternary marker tephra in Japan II-tephras occurring in northeast Honshu and Hokkaido-. Geogr. Rept. of Tokyo Metropol. Univ. 21 (The Memorial Volume of Professor Hiroshi Toya), pp. 223-250.
- 北海道火山灰命名委員会 (1982): 北海道の火山灰. 23 pp.
- 北海道埋蔵文化財センター (1986 a): 木古内町札前遺跡. 128 pp.
- 北海道埋蔵文化財センター (1986 b): 知内町湯の里3遺跡. 54 pp.
- 北海道埋蔵文化財センター (1987 a): 上磯町矢不來2遺跡. 91 pp.
- 北海道埋蔵文化財センター (1987 b): 木古内町建川2・新道4

- 遺跡. 614 pp.
- 町田 洋・新井秀夫・森脇 広 (1981): 日本海を渡ってきたテフラ, 科学, 51, pp. 562-569.
- 町田 洋・新井秀夫・小田勝夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984): テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログ-. 古文化財調査委員会編「古文化財の自然科学的研究」, 984 pp., 同明舎: pp. 865-928.
- 町田 洋 (1985): 松前町-札前遺跡における火山灰層. 札前, 401 pp., 北海道松前町教育委員会: pp. 296-299.
- 佐々木竜男・片山健弘・音羽道三・天野洋司 (1970): 渡島半島の火山灰について. 北海道農業試験場土性調査報告, 20, pp. 255-281.



第39図 火山灰の鉱物組成図

2 残存木材樹種同定

三野紀雄（北海道開拓記念館）

資料出土地点	資料No.	樹	種
SB-3 拝殿	3	クリ属(<i>Castanea</i> sp.)	クリ
	13	クリ属(<i>Castanea</i> sp.)	クリ
	16	トウヒ属(<i>Picea</i> sp.)	エゾマツ
SX-2 稲荷社	2	アスナロ属(<i>Thujaopsis</i> sp.)	ヒバ
	3	アスナロ属(<i>Thujaopsis</i> sp.)	ヒバ
	4	イチイ属(<i>Taxus</i> sp.)	イチイ
	5	アスナロ属(<i>Thujaopsis</i> sp.)	ヒバ
	6	アスナロ属(<i>Thujaopsis</i> sp.)	ヒバ
	7	カラマツ属(<i>Larix</i> sp.)?	カラマツ?
古木 境内植栽樹木	1	アスナロ属(<i>Thujaopsis</i> sp.)	ヒバ
	2	アスナロ属(<i>Thujaopsis</i> sp.)	ヒバ
	3	アスナロ属(<i>Thujaopsis</i> sp.)	ヒバ
	4	アスナロ属(<i>Thujaopsis</i> sp.)	ヒバ
	5	アスナロ属(<i>Thujaopsis</i> sp.)	ヒバ
	6	アスナロ属(<i>Thujaopsis</i> sp.)	ヒバ

※ 樹種同定の方法：木材小片を3分割し、それぞれより木口面・柃目面・板目面を観察できる薄片のプレパラート標本を作成し、木材組織を観察し樹種同定をおこなった。

観察の結果：社殿遺構SB-3(拝殿)ではクリと思われるクリ属(*Castanea* sp.)の樹木が、社殿遺構SX-2(稲荷社)ではヒバと思われるアスナロ属(*Thujaopsis* sp.)の樹木が主に柱材として用いられていた。境内植栽樹木としてはヒバと思われるアスナロ属(*Thujaopsis* sp.)の樹木が見られた。

3 動物遺存体

包 含 層 動物遺存体は、包含層から出土した貝類、獣骨約650点とSF-1～5の水洗処理で
焼 土 層 検出した貝類、獣・魚骨類などの小片である。種の鑑定にあたっては早稲田大学金子浩昌
 氏の指導を得た。貝類14種、甲殻類1種、ウニ類1種、魚類5種、哺乳類1種が認められ
 た。

I 貝類		13 サラガイ	<i>Peronidia venulosa</i>
1 アワビガイ類	<i>Haliotidae</i> fam. indet.	14 ウバガイ	<i>Spirula sachalinensis</i>
2 イシダタミ	<i>Monodonta labio</i>	II 甲殻類	
3 コシダカガンガラ	<i>Omphalus rusticum</i>	1 カメノテ	<i>Mitella mittella</i>
4 クボガイ	<i>Chlorostoma fischkei</i>	III ウニ類	
5 イボニシ	<i>Thais clavigera</i>	1 エゾバフンウニ	<i>Storogylocentrotus intermedius</i>
6 ヒメエゾボラ	<i>Neptunea arthritica</i>	IV 魚類	
7 エゾタマキガイ	<i>Glycymeris yessoensis</i>	1 ニシン	<i>Culpea pallasi</i>
8 アズマニシキ	<i>Chlamys farreri nipponensis</i>	2 サケの一種	<i>Oncorhynchus</i> sp.
9 ホタテガイ	<i>Patinopecten Mizuhopecten yessoensis</i>	3 カサゴ科の一種	<i>Scorpaenidae</i> gen. indet.
10 マガキ	<i>Crasostrea gigas</i>	4 ホッケ	<i>Pleuragrammus azonus</i>
11 ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	5 カレイの一種	<i>Pleuronectidae</i> gen. indet.
12 アサリ	<i>Tapes (Amygdalaphilippinarum)</i>	V 哺乳類	
		1 オットセイ	<i>Callorhinus ursinus</i>

貝類

14種認められた。包含層から出土した貝類の数は645点、その内訳は二枚貝とみられるもの241点、巻貝とみられるもの98点、ウバガイ149点、ホタテガイ59点、その他のもの98点、二枚貝は大部分がウバガイ、巻貝はイボニシ、ヒメエゾボラなどと思われる。焼土中から検出したものは焼けて小片となっているが、ウバガイ、ホタテガイ、アサリなどが多く、その他ヒメエゾボラ、イボニシ、アワビなどがみられる。

甲殻類、ウニ類

エゾバフンウニ 焼土の水洗資料中にカメノテの頭状部の石灰板の小破片やエゾバフンウニの殻の小破片がみられる。

魚類

5種認められ、いずれも焼土の水洗資料中のもので少量である。ニシン、カサゴ、カレイは椎体のみであるが、サケについては犬歯状に湾曲した大型の歯も出土している。

哺乳類

オットセイ オットセイ1種のみで、雌の上腕骨と橈骨が各1点ある。橈骨の一部には金属器で切られたとみられる痕跡がある。

食 用 貝、甲殻、ウニ、魚類いずれも遺跡周辺で捕獲することが可能なもので、焼けているものがある点や、焼土中から出土している点などから、いずれも食用にされたものと思われる。オットセイについては、骨の残存状態が良好であるにもかかわらず、上腕骨と橈骨のみである点などから、部分的に持ち込まれたものであろう。

Ⅵ ま と め

遺構や遺物についての詳細な傾向については、すでに各々の小括で述べたとおりである。ここでは、出土遺物・文献資料を対比させ遺構の構築年代を明らかにさせ、さらに遺物の上からみられる神社の盛衰や地名の由来などについて述べまとめにかえる。

1 出土遺物との対比

遺構が3期に分けられることは既に述べたので、それぞれに伴う陶磁器から遺構の年代を明らかにする。 18世紀後半～19世紀

第Ⅰ期 SB-1とSB-2の時期で、18世紀後半から19世紀初頭にかけてと思われる。これは、SB-3の盛り土下面より出土した肥前産の御神酒瓶や、唐津の小鉢、盃などで年代を決定したものである。これらの遺物は、盛り土下面と建物北側の斜面に分布することが特色である。

第Ⅱ期 SB-2とSB-3の時期で、19世紀から幕末ぐらいと思われる。これは、主としてSB-3の盛り土上面から出土した瀬戸・美濃系の碗類や、一部の徳利などで年代を決定したものである。これらの遺物は、かなり離れた位置で接合する例の多いことが特色である。 19世紀～幕末

第Ⅲ期 SB-4が構築される時期で、幕末から大正期までと思われる。これは、SB-4の敷石上面から出土した碗類や瓶類などで決定した。これらの遺物のうち、一部の徳利や盃などは、1個体が集中して出土し、ほぼ原位置を保っているものと思われる。 幕末～大正

以上の様に、近接した時期では伝世品なども多く、遺物の混在もみられるものの、建物跡についてはおよそ上述した年代が与えられるものと思われる。また、SX-1・SX-2については、周辺の遺物出土状況から第Ⅱ期に属するものと思われる。これらのことは遺物の平面分布に偏りがみられることから、間接的ではあるが裏付けられる。中国磁器は、年代がかけ離れているためか、SB-1～4の遺構とは直接結び付かないようだ。しかし、これらの遺構とは別に何本か性格不明の柱穴があり、あるいはそれと関係するのかもしれない。

2 文献資料との対比

遺物の年代から想定した遺構の構築年代を、第Ⅱ章で述べた文献資料と対比させてみると以下ようになる。

第Ⅰ期 この時期の記録として、『有川在神社棟札記録箋』に、天明3(1783)年の遷宮の記事があり、第Ⅰ期はこれ以降と思われる。遷宮した理由は、明治35(1902)年の『村社矢不來天満宮明細帳』によると、「勘解由再建」とあり、先の社地で問題が起こりこの地に移転を余儀なくされたものと思われる。建物は、『有川在神社棟札記録箋』の天明7(1787)年の記事によると、「本社壹軒宮」とだけ記されており、拝殿や末社などについては不明で、天保9(1838)年の『元宮茂邊地村鎮守矢不來天満宮事書』により、はじめて2間3間の拝殿が記されており、その建立時期は寛政年中とも読める。 天明3年 勘解由再建 天明7年

第Ⅱ期 この時期の記事は管見の限りでは見当たらない。ただし、安政6(1859)年の『延叙歴検真図』のうち、「矢不來天満宮」の絵図をみると、2間3間の拝殿と思われる建物 天保9年 寛政年中 安政6年

の後方に、軒の高い梁のやや広い建物が描かれており、この建物がSB-4（覆屋）に相当するのではないだろうか。したがって、絵図の描かれる安政頃までが第Ⅱ期にあたる。

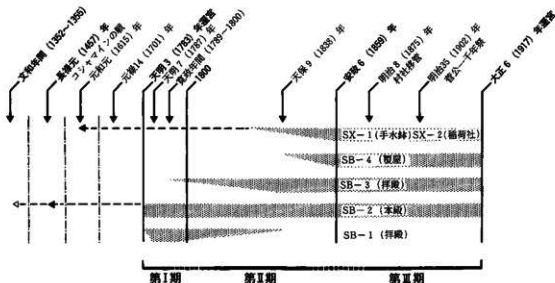
第Ⅲ期 明治5（1872）年の『壬申八月・十月巡回御用神社取調（第二・三巻）』によると、建物は「本殿一間社、拜殿二間三間」とあり、安政6年に描かれていたSB-4（覆屋）が記されていないが、安政以降大正の移転までの時期がこれにあたる。

なお、『延叙歴検真図』には、手水鉢や稲荷社は描かれていない。現天満宮にある手水鉢には、奉納年が安政6年と銘記されており、絵図の描かれた直後に設置されたものであろう。しかし調査の結果では、周囲の遺物から第Ⅱ期に相当すると考えている。あるいはⅡ期とⅢ期の境は安政6年以降になるかもしれない。稲荷社に関しては、明治5年の記事に、社殿と同じ敷地内にあるものが「祠三尺」と記されており、その起源は元和元（1615）年である。『延叙歴検真図』には、社殿の右側に小社が描かれているが、調査の結果この位置から何も検出されなかった。

3 遺構の構築年代

文献資料による年代を要約すると、第Ⅰ期は、拜殿の建立時期が天保9（1838）年以前で、寛政年間以前にも遡りうる可能性がある。主たる時期は、天明3（1783）年から天保頃とみてよいだろう。第Ⅱ期の年代は、『延叙歴検真図』の安政6（1859）年頃までとみなされる。しかし、その開始及び終末の時期は明確でない。第Ⅲ期は、第Ⅱ期以降大正6年の遷宮までとする。

以上のことから建物の時期は、遺物と文献を対比させて考えると、下表のようになる。



4 遺物からみた神社の盛衰

第Ⅰ期における陶磁器の器種は、肥前産の御神酒瓶のほか、盃、鉢などに限られ、出土点数も少ない。これは、最古期であることや、その後の建て替えなどに起因するものと考えられる。しかし、神器が主である点は、当時の信仰のあり方を反映しているものと思わ

れる。

第Ⅱ期には、遺物量が増加し、多彩な器種が広い範囲に散在することや一部埋蔵されることなどから存続期間が長く、祭祀活動も盛んであったものと思われる。

第Ⅲ期は、箱館戦争の時代に重なり、これに関わる鉛製品などが出土する。徳利などの出土が多いのは、明治8年の村社移管や、明治35年の菅公一千年祭の大祭などとも関係するものと思われる。また、集中して出土した徳利や盃は、大正6年遷宮式典の際に廃棄されたものであろうか。

菅公一千年祭

以上のように、第Ⅰ期は、日常雑器があまり無いことから人々が参集することが少なかったものと思われる。第Ⅱ期になって器種が増加し、この時期になって、村の鎮守的色彩が濃くなったものと思われる。また、銭貨の出土が多いことは天神講の懸銭と関連するのかも知れない。文化・文政期に天神講の成立が最も多いと聞く。第Ⅲ期には、祭祀や遷宮などに関係する多量の遺物がみられ大祭のあったことが窺われる。

天神講

5 周辺の地名とその変遷

矢不來天満宮跡にかかわって、「矢不來」や「茂辺地」の地名がみられるが、これらが川の名や館の名と関係していることは、すでにⅢ-1でふれたとおりである。ここではそれらの地名から派生する問題について述べてみたい。

やふらい「矢不來」：これら、長祿元(1457)年のコシャマインの戦の時、茂別館に攻め寄せたアイヌの放つ矢が一本も館に届かず、天満宮の加護によって館は不落であったという故事によって、以来「矢不來」の文字をあてたといわれる。ここにいう「矢不來」が天満宮を指すものか館を指すものかは明確でないが、その疑問を解く手がかりは天満宮の御神体漂着伝説⁽¹⁾の中にありそうだ。

コシャマインの戦

御神体漂着伝説

天満宮は、御神体が浜に漂着したことによって興され、その漂着地の沢を「カムイヤンケナイ」と呼んだと伝えられる。これはアイヌ語の“kamuy-ydqke-nay”で「神が・(それを)陸に上げる・川」という意味⁽²⁾に解され、通例であれば鮭などの遡上河川が想定されるのであるが、ここでは御神体が漂着したことを結びつけられている。

「カムイヤンケナイ」

一方、[函館管内名所旧跡調査]⁽³⁾によれば、「矢不來」に「やきない」の仮名がふられている。これは「ヤンケナイ」の「ン」が消えて訛ったものと解され、4音で構成される点では「ヤフライ」に通じる。とすると、「カムイナケナイ」から「カムイ」がまず脱落し、次に「ヤンケナイ」→「ヤキナイ」→「ヤフライ」の順で転訛したものと考えられまいだろうか。つまり、「矢不來」は文字の上ではコシャマインの戦の故事を表すものの、音の上では「ヤンケナイ」がその下敷となっているのである。おそらくは、「カムイヤンケナイ」と御神体漂着伝説の関係についても、元来のアイヌ地名に和人の神の伝説が付け加えられたのではないだろうか。

「やきない」

もへじ「茂辺地」：これは、「矢不來天満宮縁起」⁽⁴⁾では「門別」(もべつ)、『福山秘府』⁽⁵⁾の館関係の記事では「茂別」、同書の編纂された天明頃には「茂部地」などと記され、現在は「茂辺地」と記して「もへじ」と訓んでいる。これは、アイヌ語の“mo-pet”が語源で、「小さい・川」の意に解される。文字の上では「門別」や「茂別」の2文字表記が古く、「茂部地」や「茂辺地」の3文字表記へと変化したとみられ、音の上では、「モベツ」→「モベチ」→「もへじ」の順で転訛したものと考えられる。

天明頃

表記

“mo-pet” ところで、語源と考えられる“mo-pet”の“mo-”は一般的に次の2種類の用例があると
いわれる。⁽⁶⁾①は、大小の2河川の小さい方を表わす場合で、②は、本流と支流のうちの
支流を表わす場合である。しかし、現在茂辺地川と呼ばれている川は、長大な川であり、
これと対になるべき“si-pet”「大きな・川」に見合う川はみあたらない。あわせて、これ
は本流そのものに対してつけられた名で、支流を指しているものでもない。そうすると、現
在の茂辺地川の地名は一般的な“mo-pet”の用例のいずれとも一致しないことになる。何
らかの混乱が生じたのであろう。

地名の変遷 そこで想起されるのが、「矢不來」の字をあてた際の地名変更の件である。矢不來川は
茂辺地川に比べ明らかに小流であり、これを仮に“mo-pet”と呼んでいたとしても何らさ
しきわりはない。一方、茂辺地川は鮭の遡上河川であることを考えると、これを「カムイ
ヤンケナイ」とみなすこともできるのではないだろうか。ところで先に引いた「函館名所
旧跡調」には「カムイヤンケシナイ」とあり、この「シ」は“si-”または“-usi-”と考えら
れる。“si-”の場合は、「神が・（それを）陸に上げる・大きな川」と解され、“usi-”の場
合は、「神が・（それを）陸に上げる・のが習いである・川」と解される。神が陸に上げ
るものを“鮭”と解するならば、いずれをとっても現在の茂辺地川の名にふさわしいもの
と思われる。

地名の変遷 以上のような解釈が成り立つとするならば、次のような地名の変遷が考えられる。元來
矢不來川が“mo-pet”で、その名から館の名をとり、コシャマインの戦の後「矢不來」の
字をあてた。矢不來館跡からは、15世紀代の陶磁器が採集⁽⁷⁾されており、この時代に館が
存在していたことは確実である。その後、世情の安定と伴に館の機能の中心が、茂別館跡
へ移行する過程で、“mo-pet”の地名もそれに付いて移動したものと考えられる。しかし、
天満宮が矢不來の地に残されたことにより、御神体漂着伝説の成立の中で“kamui-yanke-
(u)si-nay”の地名は“mo-pet”とは逆に茂辺地川から矢不來の地へと逆に移動したのではな
いだろうか。そして、大正以降になって天満宮社は館のあとを追って現在地へ遷されるが、
逆転した地名だけがそのまま残されたのであろう。

以上の推論は史料に裏付け記事があるわけではなく、かつ数百年前の地名がすべて今日ま
で伝えられている保障もない以上、あくまでも可能性の域を出ないものである。しかし、
このように考えることによって初めて茂別館跡、矢不來館跡そして矢不來天満宮跡の3
者の歴史的・地理的關係が理解されるのではないだろうか。

註

- (1)『北海道口碑伝説』 北海道連合教育会 昭和15年
- (2)『地名アイヌ語小辞典』 知里真志保 昭和31年
- (3)『函館管内名所旧跡調』 函館支庁調査
- (4) 現天満宮に残る木版
- (5)『新選北海道史』 第五巻 史料一 北海道廳 昭和11年9月
- (6) 註2に同じ
- (7) 上磯町落合治彦氏蔵

引用参考文献

- 『延叙歴検真図』 市立函館図書館蔵 安政6年
『渡島國松前郡社明細帳』 函館支庁 明治12年
『北海道志卷十』 開拓使編 明治17年
『茂別郷土誌』 大正6年
『國學院雜誌』 第34卷第4号 昭和3年
『大日本神社大鑑(北海道、樺太版)』 大日本神社大鑑編集部 昭和10年
『北海道地方神社史年表』 武田信一編 昭和17年
『津輕十三湊の研究』 吉田良一 『東北大学文学部研究年報』 第7号 昭和31年
『天満宮』 竹内秀雄 昭和43年
『原色陶器大辞典』 加藤唐九郎編 昭和47年
『史跡 上之國勝山館』 上ノ国町教育委員会 昭和54～61年
『日本城郭大系』 1 北海道・沖縄 新人物往來社 昭和55年
『瀬戸内チャシ跡遺跡発掘調査報告書』 瀬棚町教育委員会 昭和55年
『史跡 松前藩戸切地陣屋跡』 上磯町教育委員会 昭和56～61年
『開陽丸』 江差町教育委員会 昭和57年
『北海道の研究 4』 昭和57年
『北海道の研究 3』 昭和58年
『中世蝦夷資料』 海保嶺夫 昭和58年
『上之國漁港遺跡』 上ノ国町教育委員会・函館土木現業所 昭和58・60年
『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館 昭和59年
『史跡福山城』 松前町教育委員会 昭和59～61年
『特別史跡 五稜郭跡』 函館市教育委員会 昭和60～61年
『仙台城三ノ丸跡』 仙台市教育委員会 昭和60年
『茂辺地煉化石製造所発見書』 遠藤明久 『上磯町の歴史散歩』 昭和61年
『16・17世紀における日本出土の中国磁器について』 大橋康二 『東アジア考古と歴史』 昭和62年
『有田町史陶芸編』 有田町史編纂委員会 昭和62年

『有川神社棟札記録覺』 『種田社家文書第一巻』 市立函館図書館蔵
『元宮茂邊地村鎮守矢不來天満宮事書』 『種田社家文書第一巻』 市立函館図書館蔵
『壬申八月・十月巡回御用神社取調(第二・三巻)』 函館八幡宮蔵
なお、上記3編は『神道大系神社編 51 北海道』 神道大系編纂会 昭和58年 所収を参考にした。

第2表 銭貨計測表

No.	出土地区	直 径	厚 さ	重 さ	備 考
1	B-16	23.70	0.95	2.0	開元通宝 (621)
2	E-17	24.25	1.10	1.5	唐国通宝 (985)
3	D-18	24.05	1.05	2.1	嘉祐通宝 (1056)
4	E-12	24.45	1.20	2.2	治平元宝 (1064)
5	E-13	23.25	0.95	2.2	熙寧元宝 (1068)
6	SB-1 ローム層	24.45	1.30	3.6	元豐通宝 (1078)
7	E-10	23.85	0.95	2.0	元豐通宝 (1078)
8	柱穴内フタ土層	24.65	1.25	3.2	元豐通宝 (1078)
9	F-16	23.80	1.15	3.0	元祐通宝 (1086)
10	D-15	22.95	1.15	2.1	元祐通宝 (1086)
11	C-16	25.15	1.40	3.1	永樂通宝 (1411)
12	C-16	25.30	1.50	2.6	永樂通宝 (1411)
13	D-15	25.35	1.35	2.2	永樂通宝 (1411)
14	C-15	24.65	1.35	3.4	永樂通宝 (1411)
15	E-13	23.30	1.20	2.4	紹聖元宝 (1094)
16	D-17	22.60	0.80	1.5	永樂通宝 (1587)
17	B-15	24.40	1.15	3.2	寛永通宝 (古寛永)
18	F-17	23.40	1.15	2.6	寛永通宝 (十万坪)
19	D-15	22.15	1.00	1.9	寛永通宝 (加工銭)
20	D-17	26.35	1.00	2.8	文久永宝 (真文)
21	C-15	26.90	1.05	3.2	文久永宝 (華文)
22	C-14	27.00	1.00	3.4	文久永宝 (玉文)
23	D-18	26.45	1.10	3.6	文久永宝 (直永)
24	B-13	25.05	1.20	2.9	寛永通宝 寛文8年(1668)年~明治2年(1869)年
25	B-15	20.85	1.40	3.2	寛永通宝 佐渡享保2年(1717)年
26	SB-1 柱穴5	23.05	1.10	2.5	寛永通宝 大坂寛保元年(1741)年
27	F-17	23.35	1.25	2.1	寛永通宝 長崎明和4年(1767)年
28	C-17	13.10×7.75	1.65	1.6	天保二朱判金 天保3年~安政5年(1832~1858)年
29	D-17	13.45×8.05	1.55	1.7	天保二朱判金 天保3年~安政5年(1832~1858)年
30	E-16	12.85×7.80	1.60	1.6	天保二朱判金 天保3年~安政5年(1832~1858)年
31	D-14	11.10×11.35	1.45	1.4	文政一朱判金 文政7年~天保3年(1824~1832)年
32	B-17	16.15×9.85	2.15	2.6	文政南緯一朱銀 文政12年~天保8年(1829~1837)年

第3表 鉄製品計測表

No.	出土地区	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	備 考
1	B-13	(26)	(頭) 9	4	1.1	釘類
2	C-16	37	(頭) 7	3	1.4	釘類
3	C-15	31	(頭) 8	4	1.2	釘類
4	C-16	39	(頭) 7	5	1.2	釘類
5	E-12	43	(頭) 7	4	2.2	釘類
6	D-12	50		5	3.2	釘類
7	D-18	63	(頭)12	5	8.4	釘類
8	B-14	92	(頭)12	5	9.4	釘類
9	C-18	(72)	(頭)12	6	9.3	釘類
10	B-13	110	(頭)13	8	17.6	釘類
11	C-15	96		6	13.2	釘類
12	C-16	102	(頭)14	8	14.1	釘類
13	B-14	108		7	16.0	釘類
14	B-13	(105)	(頭)17	6	15.5	釘類
15	C-16	112	(頭)15	6	16.0	釘類
16	C-15	113	(頭)19	7	19.2	釘類
17	C-15	92		8	29.8	釘類
18	E-18	37	(頭)13	4	6.0	舟釘
19	E-14	60	(頭)17	6	17.4	舟釘
20	E-16	66	(頭)14	4	14.6	舟釘
21	C-16	50	(頭)14	9	9.4	舟釘
22	C-16	72		9	13.5	舟釘
23	E-12	94		10	17.7	舟釘
24	B-11	126		11	47.6	舟釘
25	E-14	144		φ 14	116.5	鍔
26	C-15	70		7	17.6	鍔
27	E-13	100		8	53.7	鍔
28	D-14	112		7	26.0	鍔
29	E-13	100		8	42.2	鍔
30	E-13	95		8	53.9	鍔
31	B-12	122		10	50.8	鍔
32	B-12	126		10	72.3	鍔
33	D-18	81	24	7	71.4	不明
34	D-14	125	22	5	34.4	小刀
35	B-14	105	21	7	16.8	和鍔
36	C-16	30.3	φ 25.1		15.8	栓
37	D-13		φ 21	1	0.8	鉤
38	B-18	119	54		80.8	鑄造脚
39	C-15	125	43	3	43.0	鍔

第4表 鋼製品ほか計測表

No.	出土地区	長 　　さ	幅	厚 　　さ	重 　　さ	備 考
1	F-17	36.3	14.0	φ 10.0	4.3	煙管雁首
2	C-12	50.5	19.0	φ 8.4	8.4	煙管雁首
3	C-16	39.4	15.0	φ 10.6	7.2	煙管雁首
4	E-13	54.1	11.2	φ 10.7	3.1	煙管吸口
5	D-15	29.4	27.9	φ 17.0(0.4)	3.2	鈴
6	C-15	36.2	19.7	0.3	1.4	鍔金具
7	E-14	13.0		φ 1.9	0.6	鋼輪
8	B-14	43.8	14.5	0.3	1.2	不明
9	E-17	37.2		0.5	2.0	○
10	D-15	62.2	23.0	φ 7.8	16.0	鈎
11	C-13	70.0	17.4	1.0	3.8	不明
12	D-15		φ 25.1	1.4	3.6	鍔り鉄
13	B-13	24.3	φ 25.2	1.5	7.8	鍔り鉄
14	E-14	14.1		φ 3.8	0.3	不明細工物
15	C-15	14.0	(頭) 3.4	φ 1.6	0.1	鋼釘
16	C-15		(笠) 11.2	φ 1.2	0.4	鋼釘
17	E-13	71.8	53.3	φ 0.4	10.0	不明鋼板
18	E-14	12.5	(頭) 6.3	(太) 2.5	0.4	釘
19	C-13	20.0	(頭) 6.8	(太) 3.0	0.9	釘
20	C-13	21.2	(頭) 8.4	(太) 2.9	0.9	釘
21	C-13	21.2	(頭) 7.7	(太) 3.0	0.9	釘
22	C-15	22.2	(頭) 11.2	(太) 4.7	3.6	釘
23	C-16	15.2	13.6	0.7	0.6	小鈎
24	E-13	17.3	11.9	0.4	0.4	小鈎
25	E-13	17.0	13.2	0.8	0.5	小鈎
26	E-18	151.0		φ 1.8	3.2	簪
27	E-18	150.8		φ 1.9	3.3	簪
28	C-15	91.6	3.6	φ 3.1	5.7	不明棒状製品
29	C-15	75.3	3.8	φ 3.5	6.1	不明棒状製品
30	C-15	72.8	3.6	φ 3.1	4.0	不明棒状製品
31	C-16	61.2	7.4	2.6	7.1	不明棒状製品
32	C-12	17.4		φ 13.5	21.6	鉛製銃弾
33	C-15	23.1		φ 14.2	29.3	鉛製銃弾
34	C-16	27.6		φ 14.2	32.4	鉛製銃弾
35	C-16	31.6		φ 12.5	(8.6)	鉛製ホイッスル
36	C-16	9.3	9.1	9.0	1.0	馬骨製賽子
37	C-16	φ 13.5		2.4	0.4	木製ボタン
38	E-18	14.5	12.2	5.6	1.6	陶製印
39	D-13	100.6	38.0	39.3	312.8	砥石
40	D-18	93.2	18.7	25.1	139.8	砥石

写真図版



△矢不來海岸及び茂辺地市街を望む。(北東から) 海岸段丘上左端が矢不來天満宮跡である。



△矢不來館跡 (東から)



△矢不來天満宮
跡石碑及び旧
道B



現天満宮▷
手水鉢



△調査状況（西から）

◁調査区近景（南から）



△神木周辺調査状況（北西から）

◁SB-2 調査状況



△火山灰調査状況

◁SB-2 火山灰堆積状況



◁SB-3 敷石分布状況



◁SB-3 調査状況



△SB-3 柱穴例

◁SB-1・3 完掘状況



△柱穴3土層断面

△柱穴4土層断面



△柱穴5土層断面



△SF-3土層断面 (南西から)

△柱穴13完掘状況 (南東から)



△第Ⅱ層中古銭出土状況

△SB-3北側斜面敷石分布状況
(北東から)



◁SB-4 構築時敷石分布状況
(南東から)

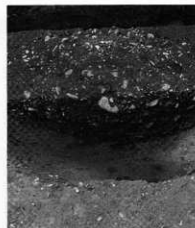


◁SB-2 調査状況 (南東から)
中央後方に角礫の敷石が認められる。



△SB-2 柱穴2土層断面
(南東から)

◁SB-2 溝状遺構プラン
(南東から)



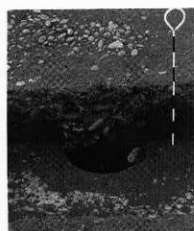
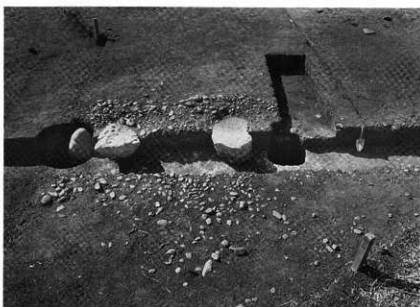


△SB-4 柱穴 4 (北から)

◇SB-2 溝状遺構 (東から)



◇SX-1 土層断面 (南東から)



△柱1 土層断面 (南東から)

◇SX-1 敷石分布状況
(南東から)



△SX-1調査終了状況(北から)



△杭2と土層断面



△SX-2検出状況(東から)



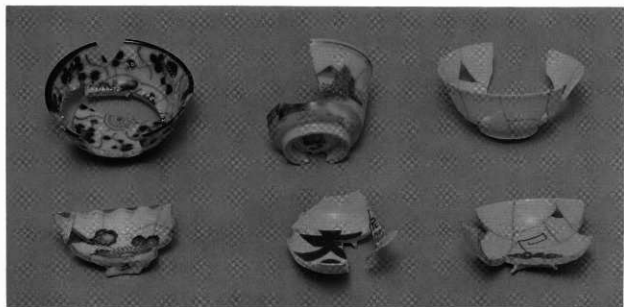
△天満宮跡より北方を望む。



△古木列(南東から)



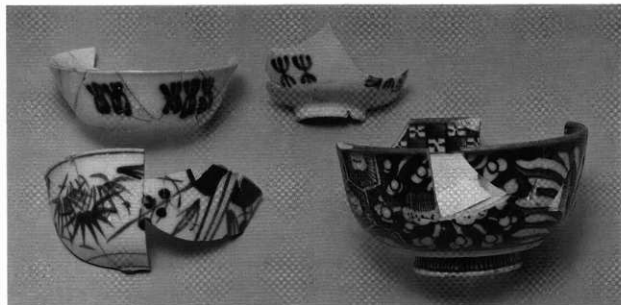
盃 (1~6)



盃 (7~12)



碗 (13~17)



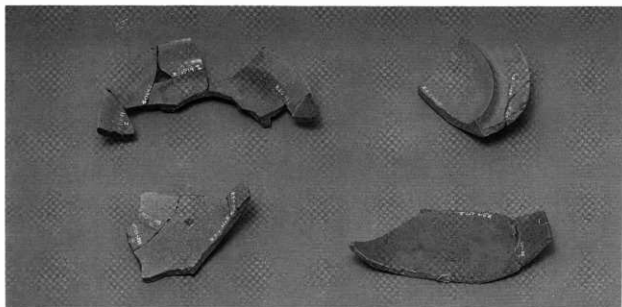
碗 (18~21)



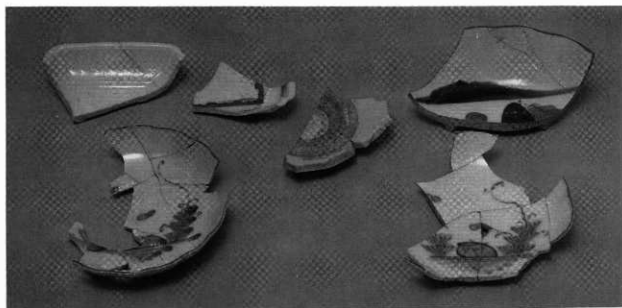
碗 (22~26)



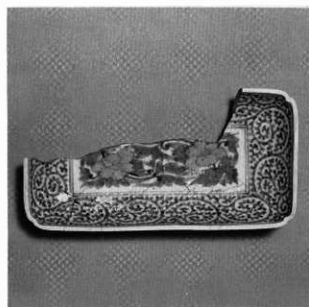
碗 (27~31)



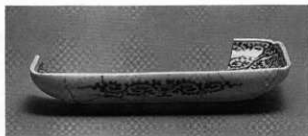
燈明皿 (32~35)



皿 (36~41)

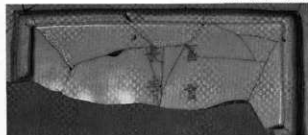


皿 (42)



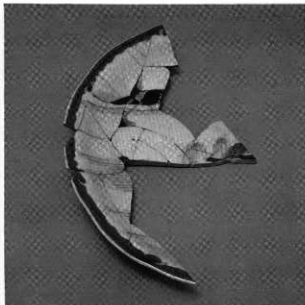
△皿 (42) 側面

▽皿 (42) 字銘

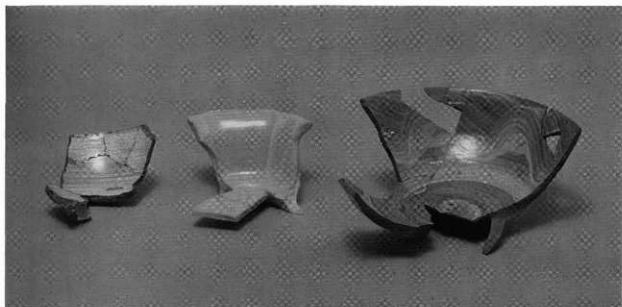




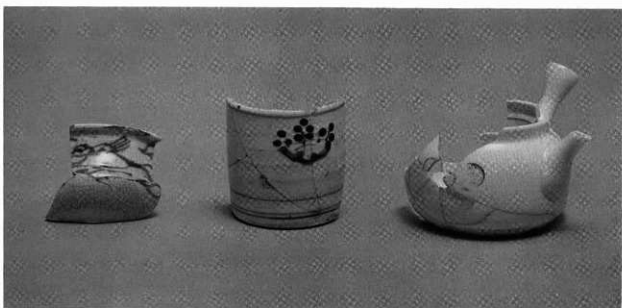
皿 (43)



皿 (44)



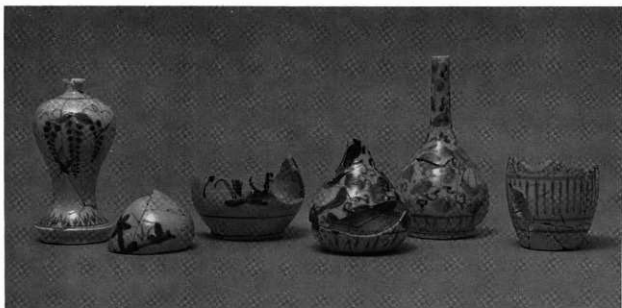
鉢 (45~47)



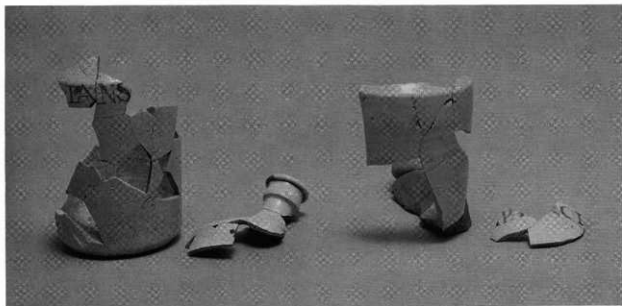
香炉など (48~50)



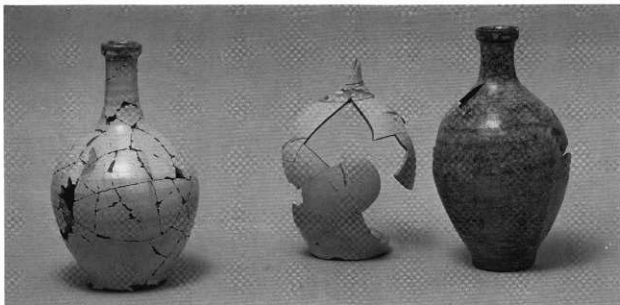
燗德利 (51～56)



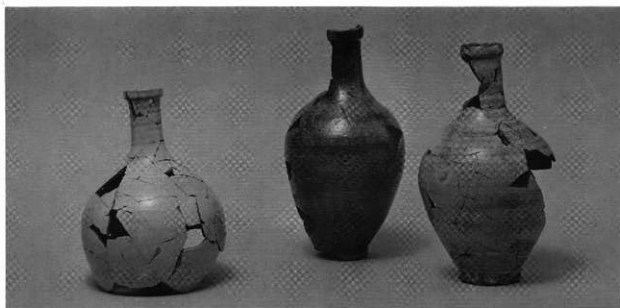
御神酒瓶 (57～62)



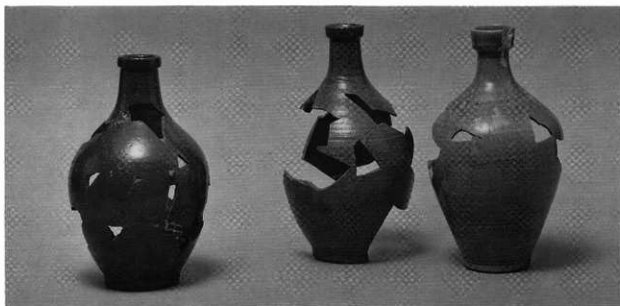
コンブラ瓶 (63・64)



德利 (65~67)



德利 (68~70)



德利 (71~73)



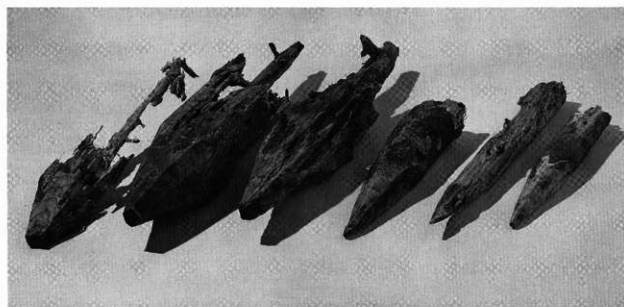
德利 (74~79)



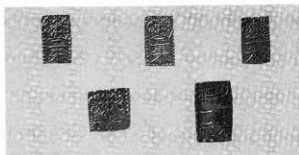
中国磁器 (80~86)



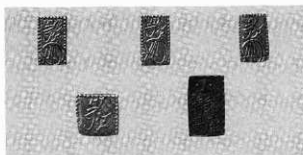
煉瓦 (87~89)



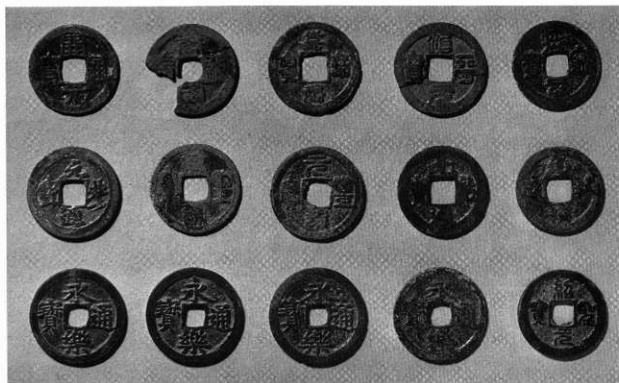
木杭 (90~95)



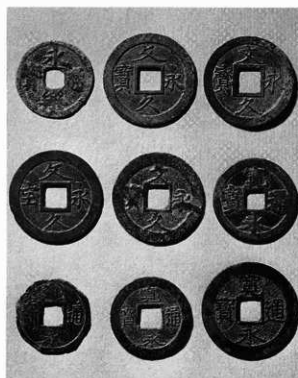
金・銀銭 (28~32)



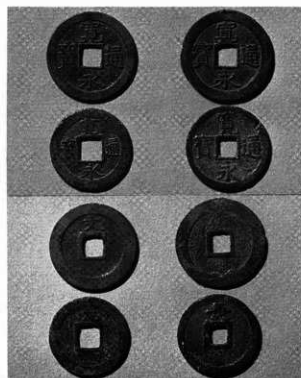
金・銀銭 (28~32)



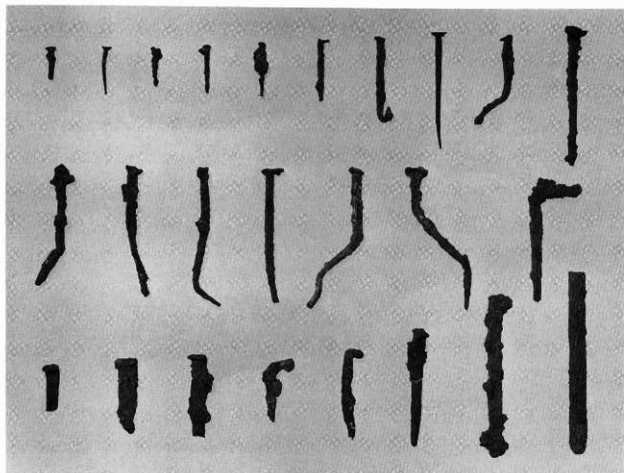
中国銭 (1~15)



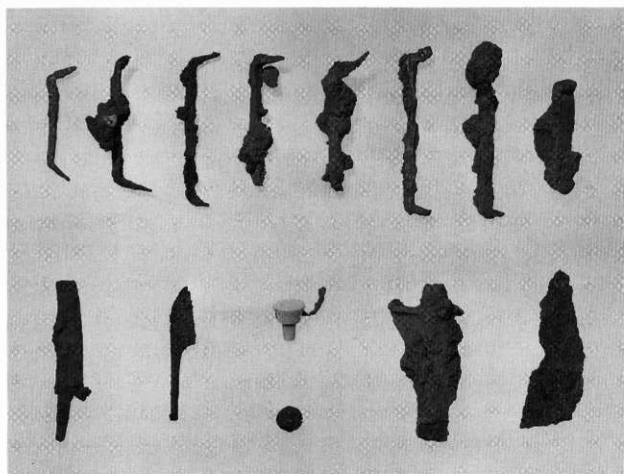
国内銭 (16~23)



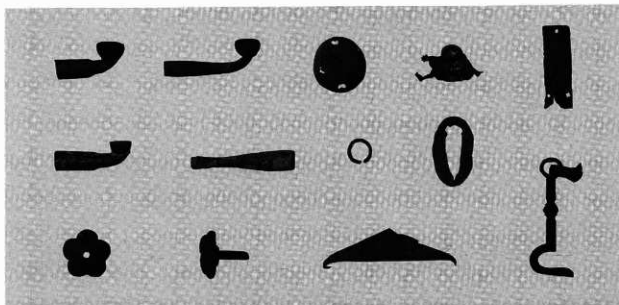
国内銭 (24~27)



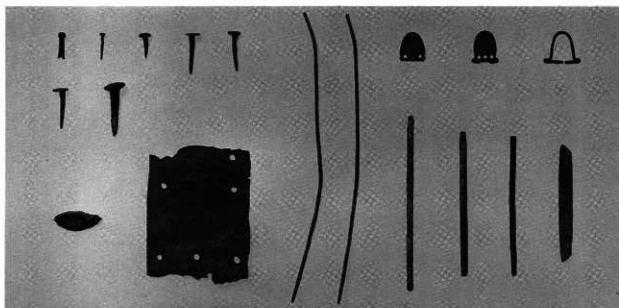
釘類 (1~25)



鋤など (26~39)



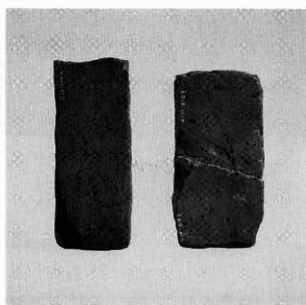
銅製品 (1~13)



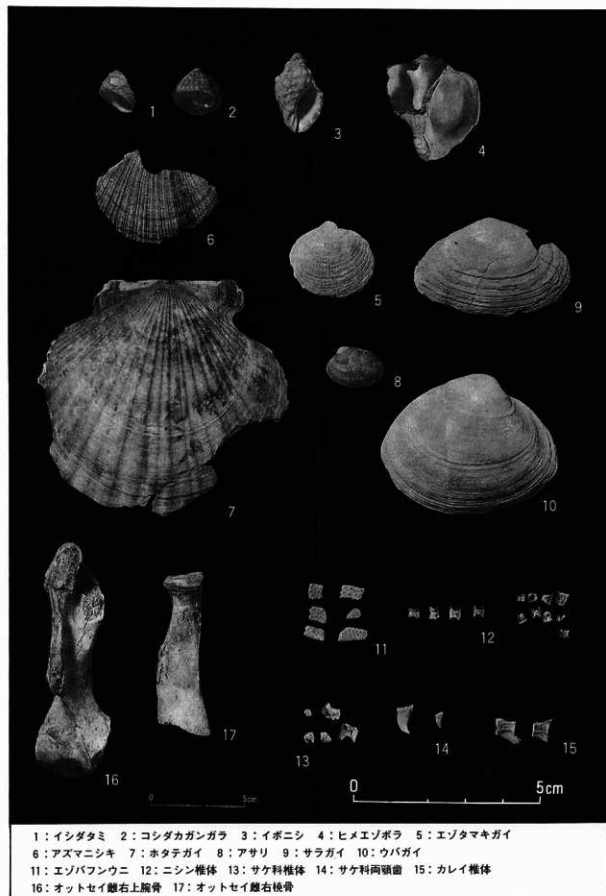
銅製品 (14~30)



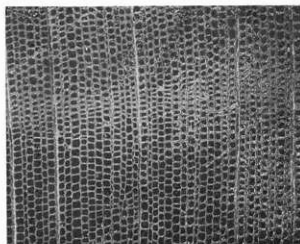
鉛製品など (31~37) (原寸)



砥石 (38・39)



動物遺存体

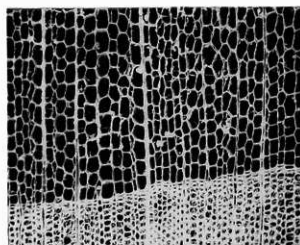


木口面 ×100



板目面 ×300

アスナロ属 (*Thujaopsis* sp.) 資料SX-2 No.1

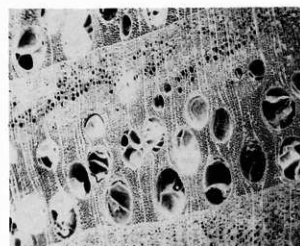


木口面 ×100

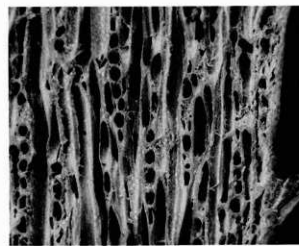


板目面 ×300

トウヒ属 (*Picea* sp.) 資料 SB-1 No.16



木口面 ×100



板目面 ×300

クリ属 (*Castanea* sp.) 資料SB-1 No.13

残存木材の組織顕微鏡写真

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第47集

上磯町や しろ
矢不來天満宮跡

——校国道228号上磯町茂辺地法面工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和63年3月31日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎011(561)3131
印刷 富士プリント株式会社
〒064 札幌市中央区南16条西9丁目
☎011(531)4711

(この報告書は、面館開発建設部の承認を得て増刷したものである。)